靖國神社今年の絵馬

会報
特攻
平成31年2月

第１２４号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
編集人　金子敬志
発行人　石井光政
印刷所　島根印刷株式会社

目次

慰霊祭等参加報告
義烈空挺隊慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・評議員　倉形桃代　2
長野県特攻勇士之像慰霊祭・・・・・・・・・・・理事　水町博勝　4
旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式・・・・・評議員　原知嵩　5
茨城県特攻勇士之像奉納式・・・・・・・・・・・会員　衣笠陽雄　9
明野忠魂塔慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・編集長　金子敬志　11
神風攻撃隊５軍神慰霊祭・・・・・・・・・・・専務理事　石井光政　13
潜水艦殉国者慰霊祭・・・・・・・・・・・・・評議員　及川昌彦　14
大阪護国神社特攻勇士之像慰霊祭・・・・・・・評議員　秋山政隆　15
埼玉県特攻勇士之像慰霊祭・・・・・・・・・・評議員　福江広明　18
平成三十年度市ヶ谷台慰霊祭・・・・・・・・・評議員　倉形桃代　20
回天烈士並びに戦没潜水艦乗員追悼式・・・・・理事　水町博勝　20
若潮の塔四十五周年慰霊大祭・・・・・・・・・評議員　福江広明　21
会員投稿
第一戦隊の戦闘（抄）・・・・・・・・・・・・会員・編集長　金子敬志　23
航空「特別攻撃隊」戦果からの考察（後編）・理事　中溝二郎　25
特攻に散った先輩・・・・・・・・・・・・・会員　水町勝博　34
筑波海軍航空隊記念館研修・・・・・・・・・評議員　中村格　38
連載　山ある記５・・・・・・・・・・・・・会員　原知嵩　40
文芸欄　歌俳柳の広場
短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・

平成30年義烈空挺隊出撃の地・玉砕の地慰霊祭

評議員　倉形桃代

ここ数年、毎年5月と6月に行われる義烈空挺隊の慰霊祭に有志として参列している。平成30年は、第一空挺団創立60周年の節目の年であり、それを祝うように慰霊祭当日は、梅雨時期ではあるが、両日とも天候に恵まれた。「空の神兵」の後輩たる空挺隊員の皆様と参列させて頂ける事を、心から光栄に思っている。

「健軍出撃73周年慰霊祭」

平成30年5月19日、熊本県熊本市に所在する陸上自衛隊健軍駐屯地内「義烈空挺隊慰霊碑」前において、全日本空挺同志会熊本県支部（支部長・園田郁夫氏）主催の「健軍出撃73周年慰霊祭」が斎行された。慰霊碑のある一画は、駐屯地の隊員の方々によって、常に清々しく整えられている事を嬉しく思う。慰霊碑は白い落下傘や色とりどりの花に囲まれている。手洗いされた碑までの白い玉石は、この日の為に隊員の方々の手によって浄められた。参列者は空挺同志会・直海康寛会長、第一空挺団・戒田重雄団長はじめ、関係者約１００名であった。

慰霊祭は、西日本集中豪雨で亡くなられた方々への黙祷から始まった。献灯、国歌斉唱、黙祷、熊本偕行会名誉会長・中垣秀夫氏による慰霊の詞、献詠「義烈空挺隊を想う」が捧げられた後、参列者全員による献花、電報披露が行われ、西部方面音楽隊の吹奏に合わせて「空の神兵」を合唱、献灯の消灯、園田支部長の挨拶で慰霊祭は閉式となった。

健軍駐屯地内の義烈空挺隊慰霊碑

一般参列者代表・中垣秀夫氏の「慰霊の詞」は、日本の落下傘部隊の歴史が分かりやすく纏められ「義烈空挺隊員として、持てる力を全て尽くして散華された英霊の崇高な勇姿を永く後世に伝えることは我々の使命です。現在の日本の平和と繁栄が英霊の方々の尊い犠牲の上にあることを想い、改めて感謝と崇敬を表する次第でございます。」とお気持を述べられた。そして「朝な夕なに訓練に励む目前の自衛隊員に対し、英霊の格別のご加護を賜らんことを祈り」とのお詞は、参列者全員の祈りでもあり、私はとても感銘を受けた。

慰霊祭後、駐屯地内にある資料館も見学した。義烈空挺隊が玉砕した現場・沖縄の読谷飛行場跡に建っていた４代目の木碑も、ここに大切に展示されている。

慰霊祭前日は、空港からの移動中、熊本県支部の高見清十事務局長のご案内で、義烈空挺隊ゆかりの地巡りの研修があった。最初に訪れた健軍駐屯地内の慰霊碑前では、慰霊祭の準備が着々と進んでいた。その後、駐屯地近くにある義烈空挺員が出撃前に故郷遥拝をした地を訪れた。３年前迄は空き地になっていたが、昨年は敷地の半分に住宅が建てられ、今年は全て住宅地になっていた。それまで空き地であった事が奇跡だったのかもしれないが、時の流れの中で面影を偲べる景色がなくなった事を、とても寂しく思った。

次に訪れた「観音湯」（詳細は会報92号参照）には、義烈空挺隊の英霊を供養する為に建てられた普賢菩薩像がある。銭湯は平成21年に閉店したが、後を継いだ堤幸子さんは、像を建立された義母・堤ハツさんのご遺志を継いで、この普賢菩薩像の小さなお堂をずっとお守り下さっ

ている。今回は、久しぶりに浴場の内部も見学させて頂いた。美しいタイルで装飾された浴室の壁は、２年前の熊本地震の被害もほとんどなく、以前拝見した時のまま残っていた。昨年訪れた時、地震で倒れたままだったお堂脇の副碑が、英霊の後輩たる空挺隊員の方々の手によって元の位置に戻された。「観音湯」周辺の街並みも、軒を連ねていた建物がなくなり、ガランとなった印象を受けた。幸子さんは、日本舞踊を嗜まれる等お元気そうであったが、真心を込めて受け継がれて来た普賢菩薩像と義烈空挺隊員の物語を、末永く残していけるのか、移りゆく時代の中での行く末が案じられる。

「義烈沖縄慰霊祭」

平成30年６月２日、義烈空挺隊玉砕の地・沖縄の読谷飛行場跡における慰霊碑献花式、摩文仁の丘平和祈念公園内「義烈」碑前における慰霊祭が、全日本空挺同志会沖縄県支部（支部長・桃原浩太郎氏）主催で行われた。昨年から、航空自衛隊那覇救難隊の有志も参列するようになり、梅雨空の下であったが、全日本空挺同志会副会長・寺崎芳治氏、戒田第一空挺団長はじめ約50名が参列した。

最初に義烈空挺隊玉砕の現場である読谷飛行場跡の木碑前にて献花式が行われ、濱田種夫事務局長より木碑建立の経緯の説明を伺った。後、摩文仁の丘平和祈念公園内の「義烈」碑前に移動して、沖宮の神職により斎行された。第15旅団音楽隊の吹奏に合わせて国歌斉唱の後、黙祷・修祓・御霊鎮めの儀・献饌・祝詞の後、桃原支部長による祭文、寺崎副会長・戒田団長による「追悼の辞」、義烈空挺隊の激闘を描いた絵画を掲げながら、空挺同志会顧問・田中賢一氏からの追悼文が、濱田事務局長の朗読により紹介された。英霊のもとへ届けとの想いを込めて「空の神兵」を合唱、全員による玉串奉奠・撤饌・御霊送りの儀と、祭式は滞りなく終了した。午後には第15旅団広報資料館に移動して、沖縄戦の経過が学べるジオラマで、ナレーションと広報担当の解説による戦闘経過の研修をさせて頂いた。劣勢になっていく日本軍が玉砕に追い込まれていくくだりは、涙なしに聴くことができなかった。

摩文仁の丘平和祈念公園内の「義烈」碑

健軍・沖縄の慰霊祭は、毎回現地の空挺同志会・関係者の気持の籠もった手作り感溢れるお祀りと感じる。任務が多様化してきた中にあっても、変わらず真っ直ぐに繋がれた「落下傘の絆」に感動するのである。英霊も、きっと空挺隊員の方々をご加護下さるに違いない。

また、今回は航空自衛隊那覇救難隊の研修もさせて頂いた。基地内に残る海軍の砲台がある丘に登ると、３６０度沖縄本島を見渡す事が出来る。初めての体験に、感ひとしおであった。

救難隊では、偵察機Ｕ－１２５や救難ヘリコプタＵＨ－60Ｊの見学もさせて頂き、昼夜を問わず３６５日任務に邁進されている救難隊の皆様の頼もしいお姿も垣間見る事ができた。戦跡研修・慰霊巡拝もでき、歴史の現場に立って当時に想いを馳せ、体感することができた、たいへん有意義な旅であった。

長野県特攻勇士之像慰霊祭に参列して

理事　水町　博勝

平成三十年十月十日（水）長野県に奉納された長野県護国神社の境内、特攻勇士之像前に於いて催行された三回目の慰霊祭に参列した。特攻勇士之像は写真中央、神社入口正面の右に在り、新たな像は何かなと参拝者に気付いてもらう、神社および関係者の特攻勇士への崇敬な配慮を伺うことができた。

慰霊祭は奥谷宮司のもと、参列者は像設立委員会、奉賛者、神社総代の代表者の十三名、斎主以下祭員二名により慰霊の神事が行われ、玉ぐし奉奠は、参列者全員が玉串を奉り拝礼した。

長野県特攻勇士之像（中央奥）

その後、直会は神社境内の美須々会館に移り、会場に入ると料理等が用意されホテルと見間違うほど、神社のホームページには結婚式場が案内されていたが、一瞬にしてその実力の一部を見た思いがした。

前年の慰霊祭参列の衣笠専務理事から、直会では挨拶があると聞いていたので、事前に会の「パンフレット」と「あゝ特攻勇士之像」建立状況を持参し、各位に配布して、挨拶の中で当会の状況を知っていただくために、資料を説明し、見て戴き、ある方は長野は（像建立）遅かったなと感想を言われました。長野は十六番目ですが一道一都二府四十三県の中では早く、まだ事業は途中ですからとお答えした。

先月秋の彼岸に世田谷山観音寺において年次法要が執り行われました。その折来賓保坂世田谷区長は挨拶の一部で「戦争末期、世田谷区からは松本市郊外の浅間温泉に現在の代沢・東大原・駒繋など小学校七校学童二千五百名が、戦果を逃れ不慣れな疎開生活をしていた。疎開先には松本空港に出撃前に待機していた特攻隊員と疎開児童達は、交流のひと時を過ごしました。子供たちは人形を作り隊員に渡し、隊員は愛機にそれを結んだ、そして出撃地に移動の前に、隊員はお別れの壮行会で歌い、戦争が終わったら此処富貴の湯（＝浅間温泉）へ真っ先に戻ると歌詞にしたためた。」と紹介された。その半月後に、この地で特攻勇士の慰霊に参列できた縁に感慨を覚えた。

そして地元ではどの様にこの話が伝えられていますかと尋ねた。その事実は朝鮮から松本を経由し出撃地に向う途中、当地に滞在した特攻隊、戦後その振武隊で生き残った方から聞いています。と送った方、送られた方からの話を聞いて、特攻隊員には一方ならぬ思いを残しているのだと痛感した。

玉串奉奠

平成30年度旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式に参加して

評議員　原　知崇

一　追悼式

串良海軍航空隊は昭和十八年に開隊され、以後整備教育を主任務とする練習航空隊として、さらに昭和二十年よりは予科練教育を任務としていたが、同年三月一日からは特別攻撃隊が出撃していった基地でもある。近傍には現在は海上自衛隊鹿屋航空基地となっている鹿屋海軍航空隊があり、こちらも特攻隊が出撃していった基地で第五航空艦隊の司令部が置かれ、特攻作戦の指揮が執られた。この地域は特別攻撃隊が最後に飛び立った場所として、その出撃総数は陸軍の知覧以上である。しかしながらそれらは同地固有の部隊ではないので、この追悼式は「串良基地出撃戦没者」という名称となっている。

特別攻撃隊三百六十三名、一般攻撃隊二百十名。合計五百七十三名の魂を慰める白亜の慰霊塔は、今は道路となっている旧航空隊時代の滑走路、東西千三百メートル、南北千二百メートルの二本が交わる点の、大きな台上に建っていた。周囲は清潔に整備され平和公園となっており、公園内は約二千本の桜が植えられている。春にはさぞ美しい花を咲かせる事であろう。「海軍攻撃第二五四飛行隊串良基地派遣隊」「予科練串良空八期会」「第九期乙種飛行予科練習生有志」「第一岡空若桜会」「串良海軍航空隊飛行予科練習生第三期生」「正気隊」「皇花隊」「常盤忠華隊」といった立派な石碑が並び、在りし日の賑やかな戦友会、同期会の様子が偲ばれる。石碑の字を指でなぞっているのは縁者だろうか。慰霊塔の周りには特攻隊慰霊顕彰会のものも含め、大きな花輪も並ぶ。

白亜の慰霊塔

平成三十年十月十三日、秋晴れとはいえ頬には冷たい風が触れる中、十四時になり主宰者である市の職員、そして生存者、遺族ほか参列者が席に着き、粛々と追悼式は開始された。

一同拝礼ののち、市の職員と海上自衛官によって国旗と軍艦旗、そして市旗が掲揚される。消防音楽隊の伴奏による国歌斉唱が終わると、海上自衛隊のヘリコプター一機とＰ３Ｃ二機が追悼飛行を実施、来賓も参列者も皆テントから出て天を仰ぐ。規則正しい爆音が通り過ぎていった。

Ｐ３Ｃによる追悼飛行

続いて戦没者に対しての黙祷。静謐な時間が流れた。

式辞は鹿屋市長によって基地の沿革、各作戦について経緯を語り、そして戦死者へ感謝の気持ちを述べられた。「市民を代表して」との言葉に、この追悼式は市が一丸となって戦死者を悼んでいることが感じられた。追悼の言葉は鹿屋市議会議長、海上自衛隊鹿屋航空基地第１航空群司令と、鹿児島県雄飛会会長。船川睦夫雄飛会会長は、昭和二十年四月、特攻隊員として宇佐海軍航空隊から串良基地へ進出するも、出撃の27日に予備学生出身の大石少尉から自機が不調のため、機体を交換してくれと執拗に頼まれ最後にはとうとう、機を譲ったという人である。当時の実戦的な訓練の様子や、四百五名の戦死された同期生への想い。指揮官先頭の教訓。みたま達が全てを尽くして残して下さったのが戦後の時代であるということを切々と述べられた。

参列者全員で献花が終わると、「命ヲ捨テテ」の曲とともに、海上自衛隊の儀仗隊による弔銃発射。

九五一空隊員が遺した遺書が朗読された。「男子の本懐これに尽きるものなし。身は海底に沈むとも、魂は必ず生きて国を護る。母の写真をずっと胸に抱いて飛行作業をして来た。これから征くので写真はお返しします。今まで私の身を護ってくれてありがとうございました。思い残すこと無し。四月十二日」　航空隊生存者による合唱。指揮者は乙飛二十三期出身者。いかめしい、海軍時代を思わせる「軍歌始メ」の号令と共に「同期の桜」を歌われた。

この串良の慰霊祭は、串良町が鹿屋市と合併してから鹿屋市の主宰となったが、現在の鹿屋市はこの慰霊祭について、しっかりと継承していこうという姿勢を感じられた。追悼式には民間の関係者、ボランティアも多く参列し、官民あげて地域として守っていこうという雰囲気が感じられる。周辺の航空隊関連史跡も整備が進むなど、頼もしい限りである。

二　鹿屋航空基地を中心とした、特攻隊関連史跡

かつて鹿屋は海軍航空の重要拠点であり、鹿屋航空基地、串良航空基地、笠之原航空基地が所在しました。戦争末期には鹿屋からは九百八名、串良からは三百六十三名もの特別攻撃隊員が出撃、散華されました。

現在同地ではこうした特別攻撃隊関連史跡の保存整備事業が進められており、説明パネルや駐車場が作られるなど見学が便利になってきておりますので、今回は鹿屋基地を中心に史跡をご紹介します。

●海上自衛隊鹿屋航空基地史料館

鹿屋海軍航空隊、第七五一海軍航空隊が使用した、鹿屋航空基地跡を継承している海上自衛隊鹿屋航空基地ゲート前に隣接する形で平成五年にリニューアルされた。

広大な敷地内に繋止してある実機を見学出来る海上自衛隊航空の史料館ではあるが、もう一つの側面としては海軍史、また鹿屋を飛び立っていった特別攻撃隊員の遺書、遺品なども整理され、力を入れた展示となっている。

敷地内にはかつて船の科学館にあった二式大型飛行艇や、海中から引き上げられた天山や零式戦のプロペラも。館内の復元された零式戦は迫力の出来で、その周囲に海軍関係の展示がある。兵器、被服のほか食器など日用品に至るまで展示点数はとても多く、見学には時間を要する。九一式航空魚雷は近くで見ることは出来ないが、窓越しに見ることが出来る。入館無料。

敷地内に鹿屋市の観光物産館があり、鹿屋、自衛隊、海軍に関係したお土産物を買うことも出来る。また、自衛隊風に

メスプレートに盛り付けられた「鹿屋海軍航空カレー」などが食べられるレストランも併設。

●鹿屋護国神社

鹿屋航空基地から北東方向。鹿屋中央公園内、鹿屋市武道館の近傍にあり鹿屋出身の二千四百余柱を祀る。

明治四年に創建された歴史ある護国神社で、戊辰の役以来の戦死者戦病死者を祀ったのが始まり。公園内のため環境が良く静かな佇まいのお宮である。

境内には支那事変から大東亜戦争までの鹿屋市出身戦歿者の顕彰碑、日露戦争記念碑、砲弾などがある。

●薩摩菓子所　富久屋

鹿屋護国神社からほど近いところにある菓子店。かるかんが名物。若松菓子店の名で鹿屋基地開隊当時から「海軍御用達」の看板を掲げており、現在は大東亜戦争末期に特攻隊員用に納入していた菓子を「海軍タルト」として再現、販売している。

航空食としては片手で食べられる様に工夫した切らない細巻き寿司などの資料が残っているが、それと同じく細長くスティックを握りながら片手で食べられるように作られた「シベリア」のような優しい味の菓子。追悼行事の際にこの「海軍タルト」が配られ、それを目にした遺族が「最後の時にひもじい思いをしていたのではなかったのを知って、安心しました。」とお話になったことがあるそう。店内には特攻隊関連の展示があり興味深い。

●笠之原海軍航空基地跡地

農地の中に笠之原飛行場の地下道入り口とされるコンクリートのオベリスク状建造物が残存している。内部は埋められており、入ることは出来ない。元々は大正十一年に建設された古い飛行場で、真珠湾攻撃に参加した二航戦の艦爆隊はこを使用して訓練を実施していた。大東亜戦争開戦後に笠之原航空基地となり、昭和十九年末より本飛行場を使用した第二〇三海軍航空隊は沖縄方面の防空戦を実施するほか、二十年三月二十一日には神雷部隊の第一次攻撃を護衛した。四月よりは防空を任とした竜巻部隊が同基地を使用した。

●海軍航空隊笠野原基地跡の川東掩体壕

地下道入り口から旧滑走路を挟んで南方向にある零式戦用の有蓋掩体壕と言われるものでコンクリート製。現在は保存整備されており案内板、駐車場も整備されている。コンクリートには玉石が混ぜられている。笠之原航空基地には二百基ほどの掩体壕が建設されたというが、現存するものはこの一つのみ。この掩体壕の東側には補助滑走路があった。昭和二十年三月十八日の空襲で、基地の施設はほぼ全滅したという。

●串良平和公園

串良航空基地のＶ字に伸びた滑走路の交差点にあり、桜の名所となっている。公園内には特別攻撃隊員および一般攻撃隊員を祀る慰霊塔があり、他にも同基地に縁のあった海軍航空隊関係の碑が立ち並んでいる。ここに所在した串良海軍航空隊は昭和十八年に教育航空隊として開隊されるが、戦局悪化に伴い同基地は特別攻撃隊の基地として使用されるようになり、特別攻撃隊および一般攻撃隊合計五百七十三名が散華された。

毎年十月十五日には追悼式典が開催されている。少し離れたところには隊門跡の碑も立っている。

●串良基地跡の地下壕第一電信室

平和公園の南側にあり、市の指定文化財として保存整備されている。両側に階段を持つ壕の中心の大きな室が特別攻撃隊員が突入の際に送信した電文を受けていた場所で、当時壕内には通信設備の他、発電機なども設置されていた。

内部は見学可能で、音声ガイダンスで

説明や電信の音などを聞くこともできる。

●第五航空艦隊司令部壕跡

鹿屋航空基地史料館からすぐ東に位置する。総延長七百メートルにも及んだ壕で、空襲が激化した昭和二十年三月頃から移転し始めた。壕内には参謀室、作戦電話室、電信室、暗号室などが配置されており、宇垣纏長官はここから鹿屋、串良、国分、出水の各基地の特攻作戦を指揮した。

私有地の中にあるので、壕への立ち入りは不可。

●田崎掩体壕

鹿屋基地の南に隣接する農地内にある。鹿屋基地の資材を格納していたとされるコンクリート製の小掩体壕。駐車場などは無し。

草木に覆われ、確認が難しくなっている。

●第二鹿屋海軍航空隊の碑

鹿屋基地の南西側近傍にある野里町集落センターの敷地内にある。第二鹿屋航空隊に入隊した第二十二期乙種飛行予科練習生出身者が碑を建立した。

●大隅野里駅跡

鹿屋基地の南西近傍。鹿屋基地に隣接していた駅舎跡で、かつてはここから基地内に専用線が引き込まれ資材等の輸送が行われていた。鹿屋では昭和二十年三月十八日より空襲が始まったが、三月十九日の空襲により大隅野里駅で貨車上の弾薬が爆発し駅舎は壊滅、駅員と荷役の海軍関係者が死亡した。現在は廃線となり、線路跡はサンロード鹿屋の名前で自転車歩行者専用道路となっている。

●野里国民学校跡

鹿屋基地の西側、朝日神社に隣接している。神雷部隊が宿舎として使用していた野里国民学校の跡地。国旗掲揚台のほか、出撃隊員らの魂を祀るための「神雷特別攻撃隊員別杯の地　桜花の碑」が建てられている。当時の出撃者整列位置の付近にあり、隊員らが別れの盃を交わした地であると伝えられ、碑は山岡荘八氏の揮毫による。氏は昭和二十年、第五航空艦隊付海軍報道班員として神雷部隊と生活を共にし、インタビューを続けた。近くの小川も当時、特攻隊員が洗濯や風呂に使っていたという。

●旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者慰霊塔

鹿屋基地の北西近傍の小塚公園の丘の上にある。鹿屋基地から出撃し散華された特別攻撃隊員九百八名のための慰霊碑で、銘板にはその氏名が刻まれている。十一メートルの慰霊碑の頂部に載った鳩は、沖縄方面に向かって羽ばたこうとする姿である。毎年四月には旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式が営まれている。

茨城縣護国神社「あゝ特攻勇士之像」奉納式

会員　衣笠　陽雄

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会は、定款に定める主な事業の一つとして「あゝ特攻勇士之像」の各県の護国神社等への奉納事業を行っています。

平成19年4月に鹿児島縣護国神社に初めて奉納してから、平成29年までに16体、平成30年は、4月に沖縄県護国神社に17体目の像を奉納、そして10月に18体目を茨城縣護国神社に奉納出来ました。

17体までの奉納状況は次のとおりです。

1　19・4・12　鹿児島縣護国神社
2　19・4・13　福井縣護国神社
3　19・9・23　世田谷山観音寺（東京）
4　19・10・22　宮城縣護国神社
5　20・4・4　愛媛縣護国神社
6　20・10・26　能代八幡神社（秋田）
7　21・3・28　群馬縣護国神社
8　21・10・24　大阪護国神社
9　22・8・15　栃木縣護国神社
10　23・5・26　千葉縣護国神社
11　24・4・28　京都霊山護国神社
12　24・12・8　福岡縣護国神社
13　25・10・31　埼玉縣護国神社
14　26・9・28　大分縣護国神社
15　27・4・29　山口縣護国神社
16　27・10・10　長野縣護国神社
17　30・4・27　沖縄縣護国神社

奉納除幕式は平成30年10月14日（日）に催行されました。

奉納については、平成28年12月、茨城県偕行会が当顕彰会からの協力依頼を快諾頂き、茨城縣護国神社のご了解とご協力を得て頂き、建設準備が開始されました。

平成29年6月、茨城県特攻勇士之像建設委員会（会長　幡谷祐一茨城県防衛協会会長）が設置され、原義昭茨城偕行会長を事務局長、事務局の主要メンバーを茨城県偕行役員が担当されるとともに、英霊にこたえる会茨城本部、茨城県隊友会等のご協力を得て茨城県内の企業・団体・個人から広く奉賛を募られました。

当初は平成30年度4月末頃を目標にして施設工事が進められましたが、「特攻勇士之像」の製作に遅れが生じたため、やむなく10月初旬に延期され、14日の除幕となりました。

なお、この間、建設委員長の幡谷祐一様が急逝されましたが、ご子息の幡谷定俊が建設委員長をご就任頂き事業が継続され無事建立出来ました。

幡谷祐一様のご尽力に深く感謝するとともにご冥福をお祈り申し上げます。

除幕式は午後1時に開始されました。

神官による神事の後、陸上自衛隊勝田駐屯地音楽隊による奉納演奏の中、幡谷定俊建設委員長、藤田幸生特攻隊慰霊顕彰会理事長、熊谷猛偕行社副理事長、大澤嘉昭茨城県偕行会御名誉会長、中村恵輔英霊にこたえる会代表、小澤武隊友会代表により除幕が行われ、特攻勇士之像が姿を現しました。

続く式典では、幡谷建設委員長、佐藤昭典茨城縣護国神社宮司、藤田顕彰会理事長からご挨拶が行われ、台座の施設工事を行った雨谷勝弘氏（茨城偕行会賛助会員）に感謝状が贈呈されました。

また、事務局から建設経過と特攻勇士之像の慰霊顕彰を継続して行ってゆくために慰霊顕彰奉賛会を結成する予定との報告がありました。

式典終了後　参集殿に場所を移して直会が実施されました。

会の途中には、特攻勇士之像を鋳造した阪井泰彦氏から作成についてのエピソードの披露や海野徹那珂市市長からの特攻に関係したご親戚についてのお話がありました。

像作成者　阪井泰彦氏

参列の方々の交歓も盛り上がりましたが、最後に、熊谷猛偕行社副理事長の朗々とした謡曲の披露の後、中締めとされ、予定されていた行事を終了しました。

なお、今後の特攻勇士之像の慰霊祭は、毎年10月の第２日曜日の予定されていますので、平成31年は10月13日（日）になります。

茨城縣護国神社
住所　茨城県水戸市見川１丁目２―１
電話　０２９―２４１―４７８１
　梅で有名な水戸偕楽園から苑道沿いに徒歩５分

「碑文」
特別攻撃隊員として殉国散華された英霊を
顕彰し　その鎮魂と　我が国の繁栄を誓い
世界平和の祈りを　末永く語り継ぐため
ここに　茨城県　特攻勇士之像を建立する
平成三十年十月
茨城県特攻勇士之像建設委員会
委員長　幡谷　祐一

平成30年度明野忠魂塔慰霊祭に参列して

編集長　金子　敬志

平成30年10月20日、陸上自衛隊航空学校に於いて「平成30年度明野忠魂塔慰霊祭」が執り行われた。

この慰霊祭に特攻隊戦没者慰霊顕彰会を代表して参列させて頂いたので、概要と所見を述べる。

一　慰霊祭の概要

当日は最寄りの近鉄明野駅と駐屯地間に航空学校の送迎バスが運行され、参列者の便が図られていた。

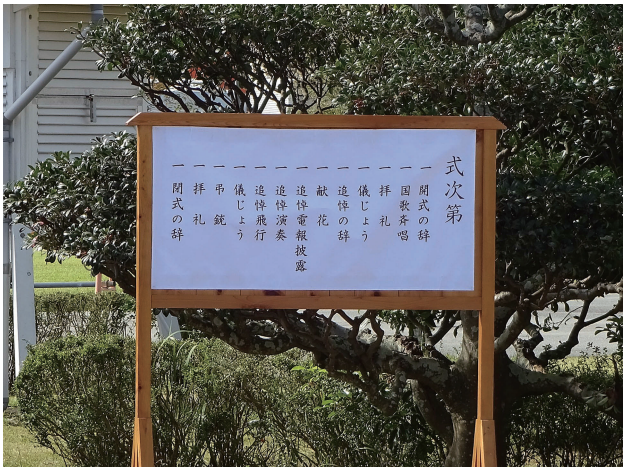
忠魂塔は駐屯地正門から見える航空管制塔の左側、飛行場の駐機場や滑走路を望む位置に立っている。その前が追悼式会場となっていて、周囲に敷きつめられた玉砂利は航空学校隊員により綺麗にならされていた。

明野忠魂塔

慰霊祭の時程は

十一時〇〇分～十二時〇〇分　追悼式

十二時十分　～十四時〇〇分　懇親会



当日の式次第看板

追悼式の式次第は

一　開式の辞
一　国家斉唱
一　拝礼
一　儀じょう
一　追悼の辞
一　献花
一　追悼電報披露
一　追悼演奏
一　追悼飛行
一　儀じょう
一　弔銃
一　拝礼
一　閉式の辞

式次第に則り追悼式は済々と行われた。

明野駐屯地隊員による儀じょうに続き追悼の辞を航空学校長　服部正陸将補と明野忠魂塔副会長　梼原（ゆはら）久生氏のお二方が心を籠めて捧げられた。

遺族、来賓、そして参列者全員による献花、追悼電報披露の後に行われた追悼演奏は伊丹駐屯地に駐屯する中部方面音楽隊が「陸軍分列行進曲」「加藤隼戦闘隊」「千の風になって」を勇ましく、またリズミカルな演奏あった。

演奏が終了した後、５機編隊による追悼飛行が行われた。会場左手から進入してきた５機編隊は、殉職した隊員を追悼す

る「ミッシングマン・フォーメーション」で、会場に近づくと５機編隊の２番機が上昇して編隊を離脱し、殉職した隊員が昇天する様子を表したものであった。

追悼飛行の後、再度儀じょう隊が入場し、儀じょう、弔銃を捧げた後、参列者全員による拝礼、閉式の辞をもって今年の追悼式は滞りなく終了した。

儀じょう隊員による弔銃発射

この後、駐屯地幹部食堂に場所を移して懇親会が行われた。各参列者は和気あいあいの内に交歓していたが、定刻となり散会となった。参列者は朝と同様、航空学校が用意した近鉄明野駅行きの送りバスで帰途についた。

二　所見

明野忠魂塔の建立経緯は

「昭和17年12月空の軍神加藤健夫少将をはじめ明野陸軍飛行学校関係の戦没及び殉職者の慰霊・顕彰を目的として建立されたが昭和35年に小畑英良大将以下の戦没者、昭和50年に陸軍戦闘隊に奉職したすべての殉国に英霊を合祀したので忠魂録に記載されていない氏名不詳の英霊多数も祭られている。更に昭和46年、陸上自衛隊航空学校関係の殉職者の英霊を合祀して今日に至っている。」

であり、慰霊対象は「駐屯地殉職者及び明野陸軍飛行学校関係戦没者」です。そのため、追悼式は陸上自衛隊明野航空学校長が執行者となっており、航空学校が全面的支援の下、済々と実施されました。

参列者の内、旧軍関係のご遺族、隊員は各地の慰霊祭同様、高齢化の影響で減少しています。

自衛官の参列は続くものと思いますが、広く旧軍戦没者、そして殉職自衛官の慰霊顕彰を知って頂く為に有志の方に参列頂きたいと思います。

毎年10月第三土曜日に実施されます。

連絡先
明野忠魂塔顕彰会事務局（陸上自衛隊航空学校内）
伊勢市小俣町明野５５９３－１
陸上自衛隊航空学校
ＴＥＬ０５９６－３７－０１１１１
（内線２０３）

明野駐屯地についてはこちらをご覧ください。
http://www.mod.go.jp/gsdf/akeno/kensyou.htm

神風特別攻撃隊５軍神慰霊祭参列報告

専務理事　石井光政

平成30年10月25日　愛媛県西条市で行われた「第43神風特別攻撃隊五軍神愛媛県特攻戦没者慰霊追悼式典」に顕彰会を代表し参列したので報告します。

松山空港に到着後、その足で松山市にある愛媛県護国神社を訪ねました。この場所に10年前の平成20年「あゝ特攻勇士の像」を奉納させていただきました。拝殿参拝後、ご多忙の額田照彦宮司に神社内をご案内いただき、ご丁寧な説明を賜りました。正月には初詣の参拝客で賑わいをみせるという境内は実に穏やかで静粛。祀られている愛媛県出身の陸海軍特攻隊員１０３名の英霊もさぞかし心静かにされているだろうと感じ入りました。

あゝ特攻勇士の像

愛媛県護国神社

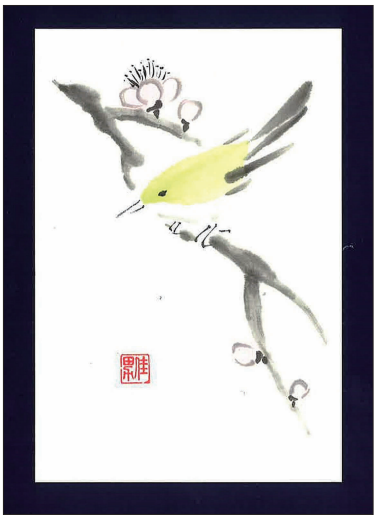
10月25日は、74年前に関大尉以下５名の神風特別攻撃隊敷島隊が日本軍として初めてレイテ沖の米艦隊に体当たり攻撃をした日で、関大尉の生まれ故郷にある西条市楢本神社では、昭和50年から毎年慰霊祭を催行しています。彼と共に散華された敷島隊４名を含めた五軍神を祀った慰霊祭には、海上自衛隊呉地方総監部幕僚長、陸上自衛隊第11旅団、愛媛県地方協力本部の陸海現職自衛官を始め、協力団体等から２００名を超える方々参列されました。

式は海上自衛隊第24航空隊の儀仗隊による国旗と自衛艦旗の掲揚に始まり、村上俊行奉賛会会長の式辞、玉井敏久西条市長と児玉千春西条市市議会議長の追悼の言葉に続き、参列者全員の献花と関中佐功績追悼歌等の献歌がおこなわれました。旧帝国海軍儀仗、海行かばの曲をバックに、三好一男新極真会師範の空手演舞、その後、曾我部勲遺族代表（神雷部隊第五建武隊曽我部少尉ご遺族）のご挨拶があり、約１時間半の慰霊祭は厳粛かつ盛大に執り行われました。

この日は、フィリピンでも飛び立った飛行場の在るマバラカット市を含めた３箇所でも、出撃時間の朝７時に合わせて慰霊祭が催されている事を村上会長が述べられました。さらに、少年時代にフィリピンで特攻隊員と交流を持った故ダニエル・ディソン氏が、特攻隊員を深く敬

愛し、自宅に特攻ミュージアムを作り、出撃基地跡地に慰霊碑を建立した事。フィリピンの若者に日本の特攻隊の精神を伝承する活動をされていた事も披露され、数年前に亡くなったディソン氏がさぞお慶びになられたであろうと思いながら拝聴しました。（なお、ディソン氏が描かれた関大尉の肖像画は会報１月号表紙に掲載しています）

本年平成31年は特攻が始まって75周年。先の大戦の意義を改めて考え、特攻の記憶継承の担い手となり、次の世代にしっかりと語り継いでいきたいと考えながらこの地を後にしました。



関行男大尉碑（楢本神社）

海自儀仗隊による弔銃

「潜水艦殉国者慰霊祭」に参加して

評議員　及川　昌彦

平成30年10月23日（火）小雨の中、東郷神社・潜水艦殉国者碑にて潜水艦殉国者慰霊祭が執り行われました海上自衛隊の３名のラッパ手による吹奏から始まり、伊呂波会勝目事務局長による司会で神事が実施されました。本慰霊祭は先の大戦において散華された英霊、任務遂行中に殉職された潜水艦乗組員や技術者等潜水艦関係者の鎮魂を目的として昭和33年から毎年挙行されております。

10月23日というのは潜水艦部隊が初めて国民の前に披露された日露戦争凱旋観艦式が実施された日です。

慰霊祭は帝国海軍潜水艦乗りの方々、ご遺族、潜水艦司令官ほか田内浩（防大12期・第13代潜艦隊司令官東郷会理事長）が参列する中、平賀源太郎（防大７期。第９代潜艦隊司令官）潜水艦殉国者慰霊顕彰会会長による祭文奏上、玉串拝礼等粛々と行事は行われ、散華された英霊に深く思いを致すひと時でした。終わりに一同潜水艦殉国者慰霊碑にお参りして慰霊祭は滞りなく終了しました。今回の参列者は75名でした。退出する神官を不思議そうに取り囲み一緒について行く東郷幼稚園の園児たちに思わず苦笑する神官たちが印象的で平和を感じました

大阪護国神社「特攻勇士之像」慰霊祭に参列して

評議員　秋山　政隆

大阪府下最大の正面鳥居

一　慰霊祭の概要

平成30年10月28日（日）、大阪府住之江区にある大阪護国神社に於ける平成30年度「特攻勇士慰霊祭」に当顕彰会を代表し参列致しましたので、報告致します。

抜けるような晴天、秋空の下、戦友、国会及び地方議会議員、現職自衛官、諸団体代表、個人合わせ、およそ七十余名のご列席者が集い、定刻通り厳かに開始された。

本殿右側に建立された「特攻勇士之像」

最初に、特攻勇士顕彰会理事、中一皓氏の開式の辞があった。その中で、ちょうど10回目となる今回、３００を超える個人、団体の寄付、大阪護国神社の格別なご配慮と自隊衛及び協力団体のご支援を得て、平成21年10月24日、除幕式を執り行うことができ、この度10回目を迎えられたことについての感謝の言葉が述べられた。また、崇高なる特攻に参戦された５２８柱の慰霊簿は像の中に納められていること、そして我が国の戦後の復興と現在の豊かな日常はこれらの尊い犠牲の上に築かれたのであり、そのことを決して忘れてはならないとの強い決意を述べられた。

その後、国家斉唱、黙祷に続き大阪護国神社南坊城充興（みなみぼうじょうあつおき）宮司による神事へと続き、特攻勇士顕彰会会長加賀本昭男氏による祭主祭文が奏上された。祭文については次の通りである。

祭主祭文

「本日、ここ大阪護国神社の地に来賓のご来席と遺族、戦友のご出席を頂き第10回特攻勇士慰霊顕彰の行事を挙行するにあたり、謹んで在天のご英霊に申し上げます。

特攻勇士の崇高な精神を唱い上げたＣＤ「あゝ特攻」を制作された大阪芸術大学の教官、学生を中心とする「日本人の心を伝える会」が発端となり財団法人特攻戦没者慰霊平和祈念協会が設立され、現在全国の護国神社に特攻勇士の像を建立し、それぞれの地に於いて一身を捧げられた特攻勇士の崇高な精神を日本国民一人一人が永遠に肝に銘じて伝承し続けることを願う活動がたゆみなく行われています。

ここ大阪護国神社に於いては平成21年10月24日、同除幕式と第１回特攻慰霊顕彰行事が挙行されました。この特攻勇士之像には、次のような一文が記されています。

「高鳴る心で、ただ一筋に愛する者のため、俺が死んで日本を守る」と特攻に身を捧げ

今も遥かな雲の彼方に、深い海底の墓標に眠る特攻戦士の御霊をお迎えする慰霊碑を建ていつまでも感謝の真心を捧げ語り合いたいのですと、この特攻勇士之像には、大阪府下出身の特攻勇士５１５柱と同様の特攻精神で戦われた石頭予備士官学校士官候補生13柱の計５２８柱が合祀されています。戦後は戦塵を生き抜いて生還された戦士たち、その戦士たちを銃後で支えられた心ある人の必死の努力により奇跡の復興と発展が成し遂げられました。今日、我が国、我が国民は世界でも屈指の豊かで平和な生活を享受しています。またアジアの諸民族はそれぞれ独立し目覚ましい発展を遂げております。この現在の平和と繁栄は特攻勇士の滅私の献身が礎となって築かれたものであることを。私たちは決して忘れません。

天皇、皇后両陛下に於かれましては、望まれてパラオ、ペリリュー島、フィリピンそして東南アジアの諸国へと3年連続でお出かけになって、戦没されたご英霊に対する慰霊顕彰の誠を身をもって示されておられます。フィリピンに於いては、昭和19年10月25日、関大尉以下6名の敷島隊が特攻の第一陣として出撃したマバラカット飛行場跡に巨大な旭日旗とフィリピン国旗を背に特攻隊員の凛々しい姿を、像神風特別攻撃隊慰霊碑の像が建立されており、毎年現地の人々による慰霊祭が執り行われます。台湾もまた然りであります。

翻って我が国の現状を見るに平和と繁栄が続く年月の中、いつしか英霊に対する感謝の念を忘れ慰霊の心も風化しつつあるのではと憂慮されます。この慰霊顕彰行事は祖国のために一身を投げ打たれたご英霊に哀悼の意を捧げるものであることは当然でありますが、更に大切なことは、現世に生きる我々が、ご英霊が思い描かれたであろう世界に誇れる日本になっているかどうかを推し測り自戒自励の原点をすべきものであると考えます。このような観点から我々はなお一層の努力と精進に励まなくてはなりません。近年宗教対立や民族紛争、テロ活動が頻発しており、我が国周辺に於いても尖閣諸島、竹島、北方領土といった我が国固有の領土への周辺諸国の侵害、不法占拠の問題、南京大虐殺、慰安婦問題等への対応は改善しつつあるとは言え、長年の平和国家の虚名から脱しきれないまま、未だに毅然たる態度に乏しく、融和的姿勢が伺われます。これこそ、独立国家としての脅威、民族の誇りの観点から誠に憂うべき問題であります。かつて国のため一身を投げ打たれたご英霊の心情を思う時、誠に申し訳なく、今も生きる我々一同、初心に立ち返り、この国のあり様を見直し立て直さなければならない時期にきていると考えます。幸い現在は安倍政権であり、国民の高い支持率を背景に一日も早く国民の安心安全を確たるものとする独自憲法の成立を期してもらいたいものであります。本日、私どもは特攻勇士の心情に思いを馳せ誇れる日本の将来を目指し、英霊に敬意を、日本に誇りを合言葉に尽力致す所存であります。

終わりに臨み、本日ご参集頂きました皆様と共に、英霊が思い描いたであろう美しい我が国の姿に、今一度思いを出しその実現に努力することをお誓いし、ご英霊の安らかなるお眠りを願って、追悼の言葉とします。

平成30年10月28日
特攻勇士之像顕彰会
兼ねて近畿偕行会会長　加賀本　昭男」

参列者全員による玉串奉奠に続き、大阪芸術大学制作「あゝ特攻」ＣＤから一曲、「特攻の絆」が音声にて紹介された。吟詠奉納は、本宮三香作、九段の櫻であった。

慰霊鎮魂の演奏は、陸上自衛隊第三師団直轄、第三音楽隊による音楽演奏、思い出の軍歌集として次の楽曲が披露された。

陸上自衛隊第３音楽隊

「日本陸軍」「勇敢な水兵」「愛国行進曲」「暁に祈る」「露営の歌」「戦友」「父よあなたは強かった」「若鷲の歌」「同期の櫻」「海ゆかば」「軍艦行進曲」以上11曲メドレー、中村八大作曲、「帰ろかな」「こんにちはあかちゃん」「幼なじみ」等、日本人の心に染み入る曲の演奏、閉式の辞で式典は締めくくられた。

二　参加所見

大阪護国神社に於ける当慰霊祭は、「特攻勇士之像」全国奉納事業に於ける発祥の一地であり、そこで執り行われる慰霊祭に参列できることは、大変有意義で、有難く貴重な経験でありました。また現地で、建立以前、当初よりご尽力された方々から生でお話しを伺えたことは、本当に自分自身の宝になると切に感じた次第です。

慰霊祭後の儀式殿に於ける直会では、この事業の発起当事者であられる大阪芸術大学芸術学部教授の池田実先生より、日本人として何が一番大事なのかを、学生さんとの取り組みの中で熱き思いをお聞かせ頂きました。「特攻勇士の像」全国奉納事業の経緯については、前項、特攻勇士顕彰会加賀本会長様の祭主祭文にございますので、ご参照されたくお願いいたします。

また磨刀石陣に於ける関東軍、石頭予備士官学校生徒による肉弾攻撃、大阪ご出身の13柱の御霊が平成24年に合祀されていますが、毎年ご参列されておられ、この合祀にも長年ご尽力されてきた生存同期生の荒木正則氏からは、実に貴重なお話しを伺いました。

時は終戦直後、中立条約を破り満州に侵入したソ連軍の強力な戦車部隊に対し、磨刀石陣に於いて手製爆薬を抱えて敢然として突っ込み散華されたこの攻撃、「順番に、しかも目の前で一人一人飛び込んで行くんだ。こんなことがあったなんて、世の中のどれ程の人が知っているのか。」と荒木氏ご自身が誰にともなく問われておられるお姿が大変印象に残りました。なお、合祀に至る経緯については、本誌94号・衣笠陽雄専務理事（当時）記事をご参照ください。

今回、初めてここ大阪府に於いての慰霊祭に参列させて頂き、たくさんの貴重なご縁を賜りましたことに改めて感謝致し、今回のご報告とさせて頂きます。

以上

埼玉県特攻隊慰霊祭に参列して

評議員　福江　広明
評議員　倉形　桃代

一　慰霊祭の概要

平成三十年十月三十一日（水）「埼玉県特攻隊慰霊祭」が埼玉縣護國神社（さいたま市大宮区大宮公園に所在）内の「特攻勇士之像」前において催行された。特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以下、「特攻顕彰会」）の代表として、今年度は福江及び倉形両評議員が参列した。

埼玉県特攻勇士之像

埼玉縣護國神社までは、最寄り駅である東武アーバンパークライン北大宮駅から、徒歩約五分の道程である。気温二十度前後、湿度四十％、風速一ｍ程度の秋日和の下での慰霊祭となった。

当該神社自体は、車道に面するものの木立に囲まれた閑静な地にある。その日当たりの良い一角に特攻勇士之像が建立され、慰霊祭当日でちょうど五年が経過したことになる。

一昨年及び昨年にあって、当慰霊祭にそれぞれ十七名の方々が参列されたと聞き及んでいたが、今年は二十六名と例年規模での参列を賜った。

参列の方々

このように参集いただけたのは、好天に恵まれたこともさることながら、今年から埼玉県特攻勇士之像奉賛会（会長は、特攻顕彰会の岩成評議員、事務局長は同会の秋山評議員）が共催になったことに加え、埼玉県特攻勇士之像慰霊顕彰会会長・関根則之氏をはじめとする関係各位による働きかけがあったおかげである。

慰霊祭は、定刻十一時に特攻顕彰会・及川評議員の進行により、国歌斉唱をもって厳かに始まった。その後の式次第として、黙祷、修祓、献饌、祝詞奏上、祭文、玉串奉奠、撤饌と続き、最後に関根会長より参列者の方々への御礼を含む挨拶をいただき、約四十分にわたる祭式は滞りなく終了した。

その後、場所を社務所二階に移し、直会に先立って関根会長から、日本国として、その国民として特攻戦没者の慰霊顕彰に関わるあるべき姿勢等についての考察を拝聴する機会を得た。

講話の主旨は、次のとおりである。

「現代日本の社会において、高齢化が進む中、戦没者慰霊に関する若き世代への継承こそが重要である。国難に身を投じた故に英霊となった方々を靖國神社や各地の護國神社において慰霊し続けることは現代に生きる我々にとって「約束」である。この約束を果たすことは国家及び

国民の責務である。
全世界的に国の為に事を成すことが蔑ろにされているようにも思える昨今にあって、日本国、同政府、そして同国民は自国の国益を、豊かさを追求すべきである。」
約一時間の昼食会を兼ねた直会は、参加された方々の活動状況を互いに伝え合う場としても活用され、和やかな雰囲気のうちに終わり散会となった。

講話をされる関根会長

二　初参列しての所見

遺族及び関係者が高齢化し顕彰行為を継続することが極めて困難となっている近年、関根会長が主張される大東亜戦争における戦死者との「約束」を果たすという観点で、我が国は大きな節目（転換点）を迎えて久しい。
今後は、戦没者慰霊に関わる諸行事及び各地に所在する慰霊顕彰施設が、急速に衰退していくおそれがある。したがって、私を含む戦争未体験の世代が、中心となってこのことに対する警鐘を鳴らし続けることが必須の時代である。
今回、祭文を読み上げる役目を仰せつかったことは、軍歴ある実父を持つ私にとって極めて光栄であった。これにより、埼玉県出身の陸海軍特別攻撃隊員百四柱の英霊に対して直接心からの感謝と敬意を捧げることができたとともに、日本の行く末を見据え、平和にして繁栄を遂げる日本であるよう尽力する先達とならんことを誓うことができた。（福江広明　記）

「英霊との約束」

評議員　倉形桃代

秋晴れの空の下、二年ぶりに埼玉縣護國神社の慰霊祭に、当顕彰会福江代表の随伴として参列した。毎回、慰霊祭の準備は、顕彰会の参列者有志が、山田宮司の準備作業の支援をするのが恒例となっている。私は集まって来たカラスにお供物をさらわれないように祭壇前に陣取って目を光らせるお役目を頂いた。埼玉在住で、熊谷陸軍飛行学校桶川分教場見学以来お世話になっている語り部・瀬戸山定氏（少飛十四期）とも二年ぶりに再会でき、現在工事中で、２０２０年に復元完成予定の桶川分教場の見学も是非一緒にとの約束を交わした。お土産に「空はどこまでも青く、僕らは底抜けに明るかった―麗しの陸軍少年飛行兵―」（鈴木京香・著）という本を頂戴した。戦後73年が過ぎて、戦争体験者から直接お話を伺える機会も少なくなってきた中、瀬戸山氏も取材に協力された本とのことなので、今後拝読したいと思っている。先輩方には、いつまでもいつまでもお元気で、私達をご指導頂きたいと思う。

慰霊祭の終わりに拝聴した関根会長のお話に、私は心を打たれた。
お国の為に一命を賭して戦われ「靖國で会おう」と後を託され散華された英霊の慰霊顕彰は亡き方々との「約束」であり、その命を受け継いだ私達日本人は、その「約束」を絶対に破ってはいけない。
「人は二度死ぬ。一度目は肉体の死、二度目は人々の記憶から永久に忘れられた時」という言葉がある。今ここにある自分の命、今の日本の繁栄は、先人からの贈り物である事を忘れず、感謝と敬意をもって、今後も未来に伝えていく努力をする気持ちを新たにした慰霊祭であった。

平成三十年度市ヶ谷台慰霊祭参加報告

理　事　水町　博勝

平成三十年十一月六日（火）市ヶ谷駐屯地（メモリアルゾーン）において市ヶ谷台慰霊祭が行われ、理事長代理で昨年に続き参加しました。

昨年は九月に行われましたが、此処メモリアルゾーンにおいて防衛大臣主催の「自衛隊殉職隊員追悼式」が十月十三日（自衛隊観閲式前日）に行われ、本慰霊祭は次の月に行われた。今年の九月は残暑が厳しく真夏の暑さが続いていて、慰霊祭は良い時期に開催されたと思っていたが、雨天、天幕の下での開催でした。

慰霊祭の状況

参列者は宇都参議院議員、山崎陸上幕僚長、武田防衛省官房長はじめ、陸自、空自の来賓、友好団体代表、阿南家・吉本家のご遺族、市ヶ谷台慰霊会、各地偕行会会長、偕行社出身別・陸士各期代表、偕行社役員等合計１６０名の参加でした。雨天の為、自衛隊殉職者慰霊碑前での記念撮影は中止となり、

15：10開式
祭主挨拶（森勉偕行社理事長）
国歌斉唱　黙祷
祭文奏上（森勉理事長）
奉唱（偕行合唱団）
「海行かば」全員合唱
焼香（阿南大将茶昆之碑・杉山元帥吉本大将自決之跡の碑前→全陸軍航空部隊・陸軍航空本部・陸軍航空総監部碑前→陸軍少佐晴気誠慰霊碑前）
献花（自衛隊殉職者慰霊碑前）
流れ解散

所見

市ヶ谷台については昨年の慰霊祭参加記事に、陸軍の作戦・軍務の中枢がこの地であることを述べたが、今も防衛省の中枢が厳としてあり、この地を訪れる度に歴史の重みを感じる。

ア　阿南大将茶昆之碑

阿南大将が航空総監就任時、特攻編成の基本方針を決定した事については、昨年の記事に記載した。総監兼軍事参議官の後昭和二十年四月陸軍大臣に就任、本土決戦に備え終戦、一身に責任を負った。辞世の句は「大君の深き恵に浴みし身は言い遺こすへき片言もなし」昭和天皇への畏敬の念をもって、遺書は「一死以て大罪を謝し奉る昭和二十年八月十四日夜陸軍大臣阿南惟幾　神州不滅を確信しつつ」と書かれていた。明治以来内閣の大臣では初めての自決であった。

イ　全陸軍航空部隊碑

主碑に刻まれた碑文及び由来記もさることながら、この碑の主眼は両脇にある「鎮」「魂」二個の副碑にある。と関係者は記しています。二、一〇四の陸軍航空部隊名が刻まれている。「我々は嘗てここに刻まれているどれかの部隊に属し、また我が身近な戦友がその部隊で戦死したことを憶えば、数個の文字で表現されている部隊名に、限りない愛着を覚えるのである。そして我々がいなくなってもこの碑は厳然と残り、後世に何かを語りかけてくれるであろう。」と碑建立の関係者の熱意が書物に残っていました。

慰霊と共に陸軍航空一家の結束の深さを感じ、そして戦後航空という軍種の魁を忍ぶことができました。

完

平成三十年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参列して

評議員　福江　広明

一　追悼式の概要

平成三十年十一月十一日（日）、「回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式」（以下「追悼式」という）が山口県周南市大津島に建立されている回天碑前において催行された。式典会場となった回天記念館は、徳山港から南西へ約十キロの沖にある大津島に所在する。

馬島桟橋に接岸する巡航船

徳山港と大津島の間は、巡航船が定期的に運行されており、式典会場の最寄り港である馬島港までは最短で二十分弱である。この日、大津島への移動にあたっては、臨時増便（九時発）の「鼓海Ⅱ」に多くの参列者と共に乗船し、穏やかな海上を馬島港に向かった。

当日の気象は、気温二十度前後、湿度六十％強、風速一ｍ程度と、絶好の秋日和。港から式典会場までは、徒歩で約十分である。受付手続きを済ませた後、回天記念館内を見学するとともに、島内に整備されている遊歩道を利用して、「展望広場」（山頂で周辺が一望できる憩いの場。「未来の風」というモニュメントが設置されている）と「魚雷見張所跡」（戦時中、宇部沖に向けて発射される魚雷を観測した場所）に足を運んでみた。

大津島の魚雷見張所跡

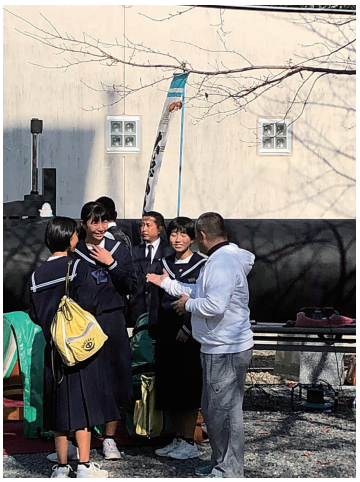
今年度は、維新回天の偉業が成就して百五十年、また回天記念館設立から五十年となる節目の年ということもあり、参列者は三百名を超えたと思われる。ご遺族約六十名をはじめ、官公庁、企業、関係の団体及び個人、総勢約百二十名の出席に加え、一般の多くの方が参列された。

大津島の回天碑

追悼式は、強い陽射しの下、定刻の十一時半に始まる。国歌斉唱、黙祷に引き続き、回天顕彰会会長・原田茂氏が式辞を述べられた。続いて、周南市長・木村健一郎氏、海自第一潜水隊群司令・佐藤広憲一等海佐、山口県知事（代理者）の三名の方からは、次世代への慰霊継承の重要性を主旨とした追悼の言葉があった。周南詩吟連盟下の峯誠吟詠会による献吟の後に、地元中高生の補助を得ながら、参列者全員による献花が行われた。この

間、海自小月教育航空群所属のT-五練習機、空自第十二飛行教育団（防府北基地）所属のT-七の各三機が、編隊を組んで会場直上を追悼飛行した。

追悼電文の奉読後には、長谷川力雄氏による尺八献奏、平和の島スピーチコンテストにおいて最優秀賞に選ばれた末武中二年生・怒和桃子さんによるスピーチ、さらには大徳山太鼓「回天」保存会による太鼓演奏の献納が行われた。



最優秀賞　怒和桃子さん

式の終了にあたり、回天顕彰会会長からは、地元の若い世代が積極的に戦没者に対する顕彰行為を継承している旨を述べられるとともに、遺族代表・塚本悠策氏にあっては、現代が追悼にかかる世代交代の時期にあることに加え、回天搭載潜水艦乗員が回天烈士に九倍する英霊となっている事実を、結びの挨拶の中で、あらためて強調された。

二　所見

大東亜戦争における戦没者のご遺族及び関係者が高齢化するとともに、我が国において少子化、就労人口の減少といった社会変化が加速化する近年、戦没者の慰霊顕彰という行為を組織的に、体系的に、継承することが困難な情勢になって久しい。

こうした情勢変化を受けて、戦没者慰霊について我が国全体が大きな転換点を迎えていることを多くの方が承知している。しかし、現実は深刻で、将来的に戦没者慰霊に関わる諸行事及び各地に所在する慰霊顕彰施設が、急速に衰退していくおそれがある。

したがって、世代を問わず先述の戦没者慰霊顕彰の先行き不安について警鐘を鳴らし続けるとともに、とりわけ十代、二十代といった若き世代が慰霊顕彰の行為を継承していかねばならない。

私自身、戦没者慰霊の世代継承を図っていく上で重要となる観点が三つあると考える。

一つは、歴史観である。いわゆる学校教育、家庭教育と共に、我が国が過去関与した戦争・紛争に関する正しい史実を、学生及び児童に積極的に学ばせ、国際常識に基づく史観を育ませる。

二つ目は、顕彰性である。若き世代が先述の歴史観を持つにとどまるのではなく、顕彰の場である慰霊祭及び追悼式への参画を促す。

三つ目は、公共性である。戦没者慰霊にかかる行事に、地域住民等の参集効果を高めるための催事を加味していく。ただし、戦没者慰霊の本来意義が決して薄れることがないように十分な配慮を欠いてはならない。

各地域の特性に応じた公共的、文化的なイベントを式典に融合し、地域住民はもとより多く方々に親しまれる工夫が必要であろう。

これらの点を今次、参列した追悼式に照らしてみると、実に良く考慮されているとの実感を持った。戦没者慰霊に関する世代継承を地道に、着実に行い得ている式典のひとつであると言えるのではないだろうか。

平和の島スピーチコンテスト、大徳山太鼓演奏、ピースカップ回天メモリアルヨットレース、回天搭乗員等の氏名を刻んだ銘石への墨入れ等、既に実行されているこれらの行事は、戦没者慰霊が新しい形態に移行していく中で、今後とも明るい展望を開いていくと確信している。

若潮の塔四十五周年慰霊大祭に参列して

編集長　金子　敬志

平成30年11月23日（金）香川県小豆郡土庄町の富岡八幡神社で営まれた「若潮の塔四十五周年慰霊大祭」に特攻隊戦没者慰霊顕彰会を代表して参列させて頂いたので、概要と所見を述べる。

一　概要

山頂が富岡八幡神社、中腹の矢印が若潮の塔

富岡八幡宮は映画「二十四の瞳」で有名な小豆島にある。小豆島への交通手段は海上交通のみで、主に岡山県か香川県からとなる。

小豆島には幾つかの港があるが、土庄港が一番近くである。

場所は、富岡八幡神社と述べたが、正確にはその境内にある淵崎護国神社である。

今年は若潮の塔が建立された昭和48年11月23日から45年目に当たり、５年毎に開催される大祭であるので、若潮の塔に祭られている陸軍船舶特別幹部候補生以下戦歿英霊千四百七柱が合祀されている淵崎護国神社の社前において慰霊祭が執り行われた。

神事を行う富岡八幡神社三木宮司

富岡八幡神社は写真で判るように海に面した小山の上にある。参道の階段は傾斜が強く２００段程度あるので大変であるが、裏側に当たる国道４３６線から車で登れる坂道が本殿直下まであるので、足に不安のある方はそちらを利用された方が良いと考える。

当日は抜けるような青空の下、定刻の11時に慰霊大祭が開始された。主催は富岡八幡神社氏子の地元有志と船舶特幹出身者で構成される「若潮の塔奉賛会」である。

慰霊大祭の式次第は次の通りである。

一　開式の辞
二　国旗掲揚（君が代斉唱）
三　黙祷（ラッパ、国の鎮め）
四　修祓の儀
五　祭主一拝
六　献餞の儀
七　祝詞奏上
八　式辞奏上　大会実行委員長
九　追悼の辞　若潮会代表
十　玉串奉奠
十一　船舶隊の歌合唱
十二　撤饌の儀
十三　祭主一拝
十四　閉式の辞

記念写真撮影

慰霊大祭は式次第に則り粛々と進行され

定刻の11時30分に終了した。

その後、社務所に場所を移して懇親会が開催された。

懇親会は若潮の塔奉賛会会長丹生利一氏のご挨拶により始まり、和気あいあい、各所で話が弾んでいたが、私は帰りの便の時間が迫った来たので、２時間程で退出させて頂いた。

二　所見

若潮の塔は昭和48年11月23日に訓練基地のあった旧淵崎村、現小豆島町淵崎地区の富岡八幡神社境内に建立されました。

若潮の塔

今回慰霊大祭が催行された淵崎護国神社は、日清・日露・太平洋戦争に出征し戦没した旧淵崎村出身者１８２柱をご祭神として、同じ富岡八幡神社境内に昭和55年造営されたものです。戦後かなりの期間が立ってからの造営は戦没者に対する深い思いと地元の方々の強い絆を感じるものです。

この淵崎護国神社に昭和58年４月10日、冒頭に記したように若潮の塔戦没者等が合祀されました。

若潮の塔は若潮会が建立し管理して来ましたが、会員に高齢化に伴い平成26年に解散、後を淵崎地区の自治会や有志らで構成される「若潮の塔奉賛会」が管理し、慰霊祭を主催しています。懇親会には奉賛会会員が多数参列されましたが、若い方も見られましたので今後も継続して慰霊行事が行われるものと感じました。

若潮の塔は、本殿から参道の階段を少し下ると右側に登り口があり、確認出来ます。塔の周囲には「若潮の塔由来記」「Ⓛのエンジン」「ああ紅に血は燃ゆるの碑」「陸軍船舶特幹生の像」が配置されています。

登り口から見える若潮の塔

富岡八幡神社は前述のように海の面した小山の頂上にあります。特に当日は快晴でしたので、四国本土を指呼の間に望むことが出来ました。

矢印が屋島、若潮の塔は階段の下方右側

眺望も抜群の地ですので、小豆島に行かれた際は、観光を兼ねて是非お参りして頂きたいと思います。

富岡八幡神社
香川県小豆郡土庄町淵崎甲２４２１１
ＴＥＬ０８７９－６２－１５３８

第一戦隊の戦闘（抄）

会員　中溝　二郎

一　第一戦隊　第二中隊

船舶特幹一期生　日置英男

われわれは、三月一三日の夜から各中隊ごとに海岸にある舟艇壕に分散し、出撃命令を待ったが、遂にアメリカ軍の上陸まで命令は来なかった。

二四、二五日と連続した艦砲射撃のため、われわれの第二中隊と、少し離れた第一中隊とも、舟艇壕・弾薬壕は全壊の状態になった。

二六日午前『アメリカ軍の上陸をみて、〝直ちに番所山に集結〟という命令が来て、中隊の最後になった私が壕を出た時には、アメリカ兵は五〇メートルぐらいの所に迫っていた。

そこから沢伝いに集合地に着いたのは午前三時頃で、第一中隊は全員集結したが、第三中隊の舟艇壕は離れていて命令が届かなかったのか、遂に夜になっても来なかった。

上陸したアメリカ軍が、部落と島の要地の高月山に陣地構築を始めている、という情報に基き、日暮れを待って高月山に将校を長とする斥候を出すことになり、われわれの中隊から中隊長の安部少尉、第二群長の江口少尉と私の三名が決定され、出発の命令を待っていたが、日没になっても命令はなく、結局はとり止めになった。

この時斥候が出ていれば、敵の情況も判り、二ヶ中隊殆ど全滅という結果は避けられたものをと、いまだに残念でならない。

座間味と阿佐の両部落を結ぶ道路の、中間点にある高月山には、敵が陣地を設けたのは間違いない、と判断され、これを破壊するための斬込み命令が出されたのは、日没前の午後五時であった。

われわれは草や木立の中に潜みながら、身辺の物を処理し、携行品は弾三発を装填した拳銃と、手榴弾一個、これにサーベル一本の軽装備という、文字通りの肉弾斬込みであった。

この時のわれわれの心には、たぎるような若い血潮に、もはや死に対する恐れもなく、尽忠報国の念のみであった。

午後七時、敵陣地襲撃の行動は開始された。

だが地理不案内のために、目的地に達するのに相当な時間を要していた。

合言葉は『山』と『川』で、第一中隊は敵陣地左側の窪地から、第二中隊はその正面と道路沿いの右側から、同時に殺到する作戦とされていた。

第二中隊の第二群の一員である私は、一列になった中程になって道路の右端を、第一群の者は山際になる道路の左側、また中隊長を先頭とする第三群は敵陣地の正面から秘かに進行した。

号令があり次第直ちに突入する隊形で、しばらく前進を続けた。

もう敵陣地に近い頃と思った時、突然進行する道路上の台地から機銃掃射を受けた。

この射撃に左側にいた第一群の者は、道路の山際にへばりついたようだが、右側にいたわれわれは。道路から崖下にとび降りた。

その機銃弾は、しばらくの間この道路一帯にとんで来ていたが、少しして第一中隊の方が攻撃を始めたらしく、射つ方向を変えたので、私は道路に這い登ってみた。

そこには一〇人程の群の先頭だった群長佐伯少尉が、弾を受けた右腹を押さえて倒れていた。それを道路左上にある雑木林の窪地に引き上げ、細帯の包を出して手当てをしたが、暗いながらも重傷と

判った。

この窪地は山の蔭になっており、まわりは暗く殆ど見えなかったので。無残な情景も見えず。ただ敵陣地から射ち出す機銃弾の赤い閃光だけが、この闇の中を走るのが見えた。

この機銃弾は、しばらく第一中隊が向かったと思われる台地正面へ飛んでいた。後で聞いた第一中隊の殆ど全員が戦死したのは、この時だったと思う。

佐伯少尉に繃帯で処置した後、地面を這って前進し、火を吐いている敵の機銃の正面に廻った。

この時、特幹の一人が、点火した黄色火薬の手投げ弾をこの銃座めがけて投げた。二、三十メートル先にもの凄い爆発音と砂けむりが上ったが、その効果の程は判らない。

彼は〝敵の後ろからやってやる〟と言い、台地の横の闇に消えたが、少しして敵の後ろ側の方向で、手榴弾の爆発と思われる音と自動小銃の音がしたので、恐らく彼が攻撃したものだろうと思う。

この勇敢だった特幹が、その後どうなったか知らない。

こうした攻撃を受けながらも、敵は機銃や自動小銃を射ちまくるので、ここには敵が相当いるなあ、と思った。

佐伯少尉のいる場所に戻ってみると、しばらく傷の痛みをこらえるように唸っていたが、その辺にいる仲間に聞こえるように、

『俺はもう駄目だから自決する。お前達も恥ずかしい死に方をするな！』

と言い。天皇陛下万才‼と叫んで頭を拳銃で射った。

この叫びに、負傷で助からないと思っていた者が、つられたのか、続いて自決した模様らしい拳銃の音が、二、三発近くで聞こえた。

私はそこから這い出して、もう一つの窪地に行くと、四、五名の特幹の仲間が斜面にへばりついていた。

顔を上げて前を見ると。すぐそこに特幹の青木君が倒れ、その先に群長江口少尉が刀を握ったまま戦死、その更に前にこれも刀を手にした中隊長安部少尉が、敵兵の死体に掩いかぶさって戦死しており、横に三人の敵兵が倒れていた。

目の前の窪地の中には、弾帯をつけ銃口をこちらに向けたアメリカ軍の機関銃が残っていた。この情況から推察するに、安部中隊長以下この銃座を襲撃し、彼我共に戦死者を出したようだった。

私は〝ようし、弔い合戦をやってやるぞ〟と、その機銃を半回転し、第一中隊が襲ったと思われるもう一つの陣地の方向に向けて射ってみた。ところが案外うまく射てるものなので。本格的に射つつもりになり、弾薬函を探すため腰をかがめた。

右側で雑木が燃えており、この周辺が少し明るくなっているため、これで私の姿が見えたのか、二、三発続けざまに自動小銃の弾がとんで来、一発が右腰に下げていた拳銃の握りに当って火花を散らし、それで跳ねた破片が右手上掌部にくい込んだのを始め、胴体と脚の右側にも数ヵ所かすり傷ができた。

手拭いですぐ傷口を固く縛り、〝どうしようか〟と考えたが、仲間を探し出し、もう一度この機銃で敵を攻撃してやろうと思い、前の窪地までさがって来た。

そこで特幹の仲間が二、三人、まだ崖の側にへばりついたままになっていた。

この頃には、梢の間からの月の光が、もう夜明けが近いことを示していた。

その崖下にいる者と協議した結果、ここで全員が戦死したのでは、隊長に情況の報告もできないので、ひとまず報告に帰ることに決め、残っている者、負傷者

の中で救える者などがいないか、とその近辺を探したが、まだ暗くてよく解らず、やむを得ずここにいる者だけで帰ることにした。

これが最後と、機銃に手榴弾をたたきつけると同時に。懸命に走り丘を一つ越えた。なお後ろから機銃を射つ音がしたが、これで負傷した者はなかった。

山を越え反対斜面に出た時、十七夜ぐらいと思われる月が、大きく西の空に傾きながら、なお輝いており。さっきまでのあの無残な戦闘があったとは思えぬ程の、詩的な情景であった。

戦隊本部は、この夜のうちに更に山中に移動しており、予め帰着地点に指示されていた集合地に着いた時には、既に明るくなっていた。

二　座間味戦で　最後に山から降りてきた男

第一戦隊　戦隊本部
船舶特幹一期生　高橋　文雄

年が明けて、愈々昭和二十年の元旦を迎え、戦隊の一同は全員揃って阿真の高台に集合し、お互いの武運長久を祈り、新年の遙拝式を行った。

二月には二乃至三回程度の米軍偵察機の飛来に留まったが三月に入るや月末近くになって、その回数も頻繁になり、二十四日にはついに百機近い艦載機が上空に現れ、慶良間の各島々に向けて銃撃を繰り返し、更に小型爆弾やロケット弾の投下が行われた。

翌二十五日には午前十時頃から沖合い遙かに数隻の敵艦影が認められ、午後には空爆の間隙を縫って艦砲射撃も加わり、次々と部落が直撃されて、民家の大部分が崩壊あるいは炎上してしまった。

ついに、来るべき時が来た。昭和二十年三月二十六日の朝を迎えて、午前七時頃から約一時間にわたり、改めて敵機の乱舞が始まり、空爆に続いて艦砲射撃も繰り返されてきた。愈々敵上陸間近しの感に迫られてきたが、果たせるかな九時を過ぎた頃になって、沖合いの輸送船が接近し、上陸用舟艇に乗り移った兵員が大挙して水陸両用戦車の後に続き、海岸線五十米近くで次々と海中に飛び込み、頭上高くライフルを掲げて腰まで水に漬かりながら、蟻のように群れて押し寄せてきたのである。

友軍はこれを阻止せんとして、海岸線の一部に掘られた壕やアダン林等の遮蔽物を利用して極力応戦に努めたが、小数の火器しか保有していない上、衆寡まさに敵せずで、忽ちのうちに敵弾の猛射撃を受けて次々と斃れてゆく者が続出し、早々に後退止むなき状況におちいった。

戦隊長は各隊を撤収させ、番所山に集結を命じた。

他方、古座間味の海岸近くの山裾に掘った壕の中に秘匿していた、戦隊の一，二中隊の㋹は、再度にわたる敵機の襲撃でその大半が破壊され、戦況は既に舟艇の出撃不能と判断して、愛艇を自らの手で焼却せざるを得ない事態に直面していた。

第一、第二の両中隊は本部へ集結との伝令に従って、将校以下六十二名が揃って番所山に移動し、同日夜、座間味から阿佐部落へ通じる道路の中間点の高月山近くに構えていた敵機関銃陣地に斬込を実施し、戦史に沖縄戦唯一と言われた彼我の壮烈な白兵戦が展開された結果、生還者が僅かに数名という悲惨な戦闘が惹起されたのである。

（詳細は日置　英男手記参照）

なお第三中隊は秘匿壕が離れていたため、本隊への集結命令が遅れて伝わり、その為、本隊に合流できなかったことは、第一戦隊の戦闘概要本文通りである。

我々は番所山から更に東へ移動して行った。

数日を経て四月五日の夜半、基地隊からは整備中隊の内藤中尉以下五名と、本部からは間瀬軍曹以下、私を含めて清野、鈴木、出口の各候補生五名からなる二組の斬り込み隊が編成され、夫々が本隊を後に真の暗闇の中を全員の激励の声を背に受けながら出発した。

我々本部選抜の斬り込み隊の五名は雨上がりで足元が滑る山肌を一歩一歩踏み締めながら、前を行く候補生の軍刀の鞘をお互いに握り合い、迷うことなく唯黙々と米軍陣地に向かって進んで行った。

漸く忠魂碑の裏付近に辿りついた時、座間味部落の中心辺りで、轟音と共に赤い火柱が天に向かって噴き上げるのを目撃し、それが別動の整備中隊の成功と確信したのであったが、彼等はその後、遂に一名の帰還者もなかった。

我々も又、目前に機関銃陣地らしいカンテラの灯が目にとまり、早速これの攻撃を開始しようとした矢先、藪の中にコの字型に張り巡らされたヒアノ線に触れ、途端に小型地雷の爆発音が起こった。

一瞬地面低く伏せたが、闇の中に呻き声が聞こえ透かして見ると、間瀬軍曹の鉄兜が半分吹き飛んで耳朶が千切れ、左側にいた鈴木候補生は腹部盲貫で残念にもやがて絶命してしまい、清野候補生も又腕に弾片を受けて負傷して居た。軍曹は貧血に耐えながらも突撃するんだと絶叫したが、私は「それでは犬死であるから一応本部に帰り状況を報告しよう」と強硬に説得し負傷者を抱えながら引き揚げることにしたが、既に夜が明け始め、敵の真只中でもあり、発見されるのを恐れて、山裾を這うようにして進み、数時間後どうにか本部へ辿り着くことができた。

その後、大岳方面へ移動した。降りしきる雨の中を、大岳の近く迄辿りついた時、突然辺りの静けさを破って銃声が唸り、矢継ぎ早の弾道が藪を貫いて、立ち木を削った屑がパラパラと肩口に降りかかってきたと思った瞬間、一発又一発、我々の伏せっている付近に擲弾筒が炸裂し始めた。今度こそ危ないと思った途端、予感通り三発目の着弾と同時に、私は胸の中に真っ赤な焼け火箸で抉られるような激痛を覚え、更に臀にも一発破片が食い込んだらしく立ち上がろうとしたが、右足が痺れてしばらくは動けなかった。

周囲を見回すと、右上方では隊長が片方の膝関節をやられて呻いて居り、左側には部隊の炊事係をしていた女子青年団の宮里澄子さんが足の先端部分を血に染めて、泣きながら我慢をしている姿が目に入った。安間軍医が駆け寄って、隊長等の傷の手当をし、野村衛生班長が私を介抱してくれた。その他にもかなりの負傷者が出ており、自力で行動の出来ない重傷者に対して夫々手榴弾が渡された。

後ろ髪を引かれる思いで別れることになったが、その後の彼等の消息については全く不明である。

ある者は傷を負い、ある者は又下痢や発熱の病に冒され、殆どが疲れ果てての逃避行であった。

負傷して意のままにならない隊長は指揮系統も次第に徹底を欠き、統率も乱れがちになったことを推測し、併せて戦況の実情からも先行きを勘案したと思われる。口頭で「軍としての統一行動は本日をもって打ち切り、今後は各自、分散して生き延びて欲しい」との伝達が下された。

かって支那大陸の最前線において、緒戦の華やかな頃とはいえ、ある時は騎兵隊の中隊長として、ある時は又戦車隊の勇者として嚇々の武勲を立てた頃を振り返り、おそらく断腸の思いであったことであろう。

私は受傷後暫くの間、衛生兵達と行動を共にしていたが、この頃から、先に投降していた一部の日本兵が米軍の煙草やチョコレートを持参し、あるいはライフという写真誌を展げて、東京やその他の本土の被爆状況を見せながら、既に終戦は間近いことを切々と説きながら、山中の残存兵に対し投降勧告に回って居た。

衛生兵のグループもこれに誘われ、遂に山を降りることを決意し、私も一緒にと言われたが頑として聞き入れなかったため「流石、特幹だ」と感心されたらしい。

私自身としては敢えて「生きて虜囚の辱めを受けず」という心境よりも、寧ろこれによって郷里の親兄弟が周囲の人達の謗りを受けること必定との思惑からであった。おそらく投降していった大半の者は、消えなんとする己れの生への渇望からであり、一旦捕虜の烙印を押されたからには再び日本に帰ることを断念し、夫々が運転手や皿洗いでもして、残る一生をアメリカの地で最後まで暮らす覚悟であったのではなかろうかと思われる。

投降勧告を拒否した私は、その後、本部の同僚であった梅村及び三中隊所属の中垣の両候補生と落ち合い、大岳の中腹付近に偶々三つ股になった木の株跡を見つけ、その周囲を天幕で覆って雨露を凌ぐ仮の住まいを造り、三人で潜伏を続けていた。

時々特攻機により撃沈された敵艦船からのものか、重油まみれになって流れついた浮遊物や、彼等が捨てたゴミの中に、色々と珍しい食料品が混じっており、これが海岸の満潮線に一列になって流れ寄った来た。米軍の狙撃を警戒しながら、夕方たそがれて視界のおぼろぎみの頃合を見計らっては出て行き、砂浜を端から端まで歩きめぼしいものを探してまわった。首から雑嚢をぶら下げ、四つん這になっての格好であり、あまり良い姿ではなかったものと思われる。それにしてもウインナーと思ったのが人糞の塊りであったり、大きなハムだと喜んで拾うとしたら水死体の腕や足であったりして驚かされたこともあった。それでもビスケットの梱包やら、肉、乾燥野菜を初め果物からバター、チーズにまでありつき、貴重なものが次々に随分と確保され、実に有難いことであった。

我々三人の潜伏した場所は、後ろが裏海岸に面した断崖絶壁で前方数米は草藪が続き、その先は赤土の斜面が露出しており、左側は遙か岬方面までこれ又草藪が一面に続くという地形であった。

迎えた七月十九日、頭上の日時計に併せて十二時を知り、ビスケットと肉の缶詰を開け、いざ昼食を食おうとしていた矢先、麓の方角から、俄かに数人と思われる靴音と同時になにやら米兵の英語らしい声が聞こえてきた。すわ討伐とばかり、梅村、中垣の二人が、途端に立ち上がろうとしたので、私が二人の帯皮を抑えてこれを制止し、米兵等が後方に回った様子を見届けると同時に、一斉に飛び出して逃走を始めた。私は真下のボサをくぐり抜けた途端、赤土の斜面に出てしまうことに気づき、ええいままよとばかり比較的こんもりとした茂みに飛び込んで身を隠したが、他の二人は岬の方角へ向かって逃げたようであった。その時、一人の米兵がライフルを構えて私の方を覗きこんでじっと見つめたので咄嗟に愈々これが最後と思い、腰の手榴弾の栓を抜こうとしたが、夏の簾の内外と同様で、こちらからは敵の顔が判るのに、幸い暗がりの奥の私には気づかずに振り返るとそのまま通りすぎて行ってしまった。

他の米兵達は横隊になって、ジャップ、ジャップと叫びながら岬方面に向かった二人の追走に移ったらしい。暫くしてバリバリと音を立てて機銃の連射が響いた直後、一発続いて又一発、手榴弾の破裂

音が二度聞こえた。彼等はもう駄目だったのかと観念しながらも夜遅くまで、じっと待続けたが、残念乍ら梅村、中垣両人の姿には遂に再びまみえることができなかった。

私は諦めかねて、暫くの間、呆然としながら、一旦は後を追って自決も覚悟したが、折角ここ迄生き延びてきたのだからと熟慮した上、考え直し、取りあえず当座の食料を背嚢に詰め、まだ友軍の一部が若干潜伏しているらしいと以前から聞いていた阿佐の裏山へ行って見ることにした。

行く先が三角山と聞いていたが、考えて見ればどの山も頂上はみんな三角であり、一つ目の山を登ったが消息を掴めないまま次の山に登った時、草むらの中に落ちていた㋺用の懐中電灯の蛍光板が目に触れ、さてはと思い、けもの道のような狭い所を登って行くと、その先に天幕が見えた。漸く辿りついたと安堵して雨の中に蹲り、拾ってきた米軍のビニールのシートにくるまり、疲れきった躰を横たえて、そのまま前後不覚にぐっすりと寝込んでしまった。

明け方近く、がやがやという声に目を覚ますと、三中隊の沢田達数名の顔ぶれが集まって居り、その中に私と同じ本部要員で大迫副官付きであった砂川の姿を見つけた。嬉しさの余り肩を抱き合ってお互い四ケ月振りの再会を懐かしんだが、彼らのグループも又、既に協議した末に投降の覚悟であることを知らされた。一人進退に迷っていた砂川に、是非私と一緒に残ろうと再考をうながし漸く納得して貰い、この日から改めて長く辛い二人だけの逃避行が始まったのである。

その後、私達が辿り着いて結局最後まで潜伏し通した場所は、島の裏側に当たるチシ海岸に突出した、長さ約五十米、幅二十米位で高さ十米程の岩山であった。

この上なら多分安全ではないかと考え、靴を脱いで直角に近い岸壁を草の根を掴みながらよじ登ってみると、果たせるかな頂上一面はアダンを混えた二米余の灌木が茂り、なんとか我々の身を隠すのに安全な場所であると判断した。

とりあえず雨露を凌ぎ、嵐の時はその中で過ごすために穴を掘ろうということになり、海岸から壊れて乗り捨てられていた舟のカスガイを抜いてきて、縦横四尺位の竪穴を掘ることになり、連日丹念に岩面を削り続けた。あつめてきた板切れと堀り出した土で屋根を葺き、漸く完成した。

来る日も、来る日も、相変わらずの日課は、ぼろぼろになった衣服に、何処からともなく湧いて住みついた虱取りで退屈を紛らわしながら、お互い遠い故郷の思い出話等を語り合っていた。

然し毎日目新しい変化もないので話の種も尽きてしまい、終には無口になる日も増え、言葉さえ忘れかけてゆくような気がして無精に寂しさが感じられてくるものであった。

手許には漂流物のお蔭で一応細々ながらも食料はだいぶ残っており、それ程不自由することもなかった。

日本軍の一般携帯食は堅い乾パンに、数える程の金米糖が入った程度の誠に貧弱な代物であったが、流れ着いてきた米軍のレーションのそれは、朝、昼、夕、と分けられた、煉瓦大の小箱が夫々十二食分纏められ、合計三十六個の梱包であった。一箱の中身は四角のビスケットが四枚、更に肉か卵の小さな缶詰が一個、マッチつきの煙草が四本、その他チョコレートかキャラメルバー等がセットされていた。又、箱の表面は湿気を防ぐため、蝋が塗られていたが、この蝋は缶詰の蓋でかきおとして貯めたものを火で溶かして灯り用の蝋燭を作ったり、食料の長期保存のための密閉に使って大変重宝したものであった。

他に二百レーションという大きな梱包も拾得した。この中にはアメリカのタバコで、ラッキーストライクやキャメルなどの二十本づつ入った小箱が二百個宛入っており、その他にチョコレートにチュウインガムが各二百枚、更に安全剃刀やチューブ入りの歯磨粉等がぎっしりと詰まっていた。

特に入隊前に喫煙をしていた砂川は早速煙草にありつき、すっかりご機嫌でぷかぷかやりだした。私は煙草は吸わなかったけれど、その様子がうまそうなので、空腹も手伝って、つい手をだしたのが病みつきで、それから癖になってしまい、とうとう喫煙をするようになった。

あるとき、海岸を捜し歩いていると得体の知れない怪しげな物体が流れついているので、よく見たらなんと頭から足の先までが優に三米もあろうかと思われるお化けイカであった

これは正に拾得物の中でも圧巻であって、恐らく艦砲の流弾にでもやられたものであったかも知れない。担ぎあげたら随分重く砂浜を引きずりながら持ち帰り、切身にして食べたが、身の厚さが三センチ以上もあり、しこしことして大変美味しいものであった。

又、ある時、干潮になった珊瑚礁を歩いて行くと、小さな水溜りに逃げ遅れた一匹の鰻を見つけ、さんざん追いかけてやっと捕まえた。鰻と思ったのはあるいはウツボかハモだったのかも知れないが久し振りの美味を頂いたものである。

あるいは又、海岸では月夜になると干潮時、大小の岩の面にタニシに似た小粒の貝がぎっしりと這いあがってくるのをみつけた。名前もわからないので勝手に「月見貝」と名づけ、これを雑嚢一杯捕ってきて、ビタミンＡの補給だとばかり、煮て食べた。又、空き缶で苦心して作った蒸し釜で炊いた上、更に何日か日干しにしたものをダシ代わりとして空き瓶に詰めて保存して置くことにした。

さて、十月の初め頃でもあったであろうか、夜間ふと眺めた中岳の頂上付近に懐中電灯の明りらしいのが幾つか点滅しながら揺れていた。何だか叫び声も聞こえるので、すわ米軍の一斉討伐ではないかと思い、じっと、息を殺して潜んだままでいたことがあった。これは誰か候補生か隊長からの要請で、おそらく、高橋達がまだ山中に生存している筈だから、なんとか救出してやって欲しいということで、宮城初枝さんを初め、島の女子青年団の人達と手分けして捜索に当り、あちらこちら呼び掛けてくれた声であった。

これを後で聞き、それとは知らず、私達二人は米軍と勘違いしたわけで、振り返って思い出すと、あの時は「高橋！、砂川！」という皆の呼び声が、ウオーウオーと海鳴りのようにしか聞こえなかったので、ただじっとおとなしくして過ごしてしまったような気がする。

それにしても大勢の方々から私達に対して、献身的な救援活動を賜ったことを、改めて御礼申し上げながらも、又々、せめてその時に山を降りていたならばという悔いも沸いたものである。

又、依然からお世話になっていた、阿佐部落の与那嶺しげ小母さんや前述の女子青年団の人達が海岸や山道の目立つ所に、何度か握り飯や蒸し藷などの食べ物を置いてくれていたらしい。然し私達は忍びの身であり、まだ日本兵の生き残りがいるということを悟られぬ為に、それを目にして喉から手が出そうな程であったけれども、じっとこらえて立ち去ったのであって、そのご好意には涙が出る程嬉しかったものである。

愈々月日も経つうちに、食料も次第に欠乏してゆき、山峡に出かけて野生の艶蕗やあざみの根は勿論のこと刺のあるまの葉までも煮て食べたが、艶蕗の苦さにはほとほと参ったものであったが、と

にかく、食えそうなものはなんでも手当り次第に口にするようになっていた。

蛇も掴まえたし、珍しく赤ん坊の頭程もあろうかと思われる、大きなヤドカリを見つけて大喜びしたこともあった。これは確か椰子蟹であったかも知れない。

その他、あまりにも長い好天続きで空缶に溜めた飲み水を、毎日少しづつ計るようにして飲んでいたにも拘らず、ついに底をつき初めてきた。近いうちに雨でも降ってこなければ、愈々私達の命も終わりだと覚悟していたところ、漸く大粒のスコールに救われ、ほっとしたことさえあった。この時ばかりは、人間食うものがいくらあっても、飲み水が無ければ生きて行けないものであるということを、しみじみと感じたものである。

雨が降ったら降ったで、普段は毎日が退屈な程、暇な二人にとって急に忙しくなるのであった。涸れはてた沢の水も潤い、岩間に溜った水につかって久し振りの水浴で垢を落したり、ぼろぼろになった衣服の洗濯に大わらわの忙しさで大変なことであった。

ひと頃、島の周囲を巡回する小型艇から呼びかけてくる、投降勧告の声に前後して流される、なんとも懐かしい、「赤蜻蛉」や「故郷」といった小学校時代の唱歌のメロディが無精に感傷をそそり、望郷の念にかられたものであった。然し、それもとっくに聞こえなくなっており、以前、海岸に流れついたあのビラの「終戦」ということは、矢張り真実であったのではないかと思いながらも、依然として銃声が聞こえたり、手榴弾らしい破裂音が響くので、私達はまだ米軍が居るのだと迷わされていた。然しそれは米軍が全部引き揚げてしまった後で村の人達が山や沢の中から、日本軍が置き去りにした兵器を拾い、小銃で畑の鴨を撃ったり、海岸で手榴弾を投げながら魚を捕っていたことを山から降りてから初めて聞かされ、その誤解に失笑したものである。

山中に於ける隠遁生活もかなりの長期になり、食糧採取に、今迄は敵に発見されることを警戒して、殆ど夕暮れ以降にしか出かけなかった岩山を、その日に限って日中そろそろと降り、辺りに目を配りながら砂浜を歩いて行き、ふと見ると山の斜面を鼻歌まじりの二人の青年が連れだって降りてきたものである。お互いの目と目が合った途端、こっちも驚いたが相手はそれ以上にびっくりした様子であったらしく、私は急いで身を隠そうとしたところ「兵隊さん、兵隊さんじゃないですか」と呼び止められた。仕方なく一応話を聞くことにしたが、その結果なんと戦争はとっくの先に終わっており、米軍は全部引き揚げて、もう島には彼等は一人もいないということを聞かされた。

途端に、私は今迄の緊張感が一辺に抜けたようになり、急にふらふらとして砂の上に座り込んでしまったのであるが、その時には栄養失調気味で、骨と皮ばかりに痩せこけ、毎日雑草を食べていたせいで、口の中は歯まで真っ黒になっていたらしい。

私も砂川もすっかり弱りきって、何分にも歩行困難ということで、青年の一人が急いで阿佐の部落まで走って状況を報告した上、仲間に呼びかけて二枚の戸板を用意してくれたので、とりあえずそれに乗せて貰い、大勢に担がれて、最後の山を何度も何度も振り返りながら降りていったのであった。

途中、遙かな空をじっと見上げると、その日の慶良間は何処までも抜けるように青く澄み渡り、あの日、米軍が大挙して上陸以来、私達にとっては一年七ケ月に渡る、余りにも長く、そして余りにも苦しかった逃避行の日々の思い出が走馬

灯の絵のように去来した。そして、ついぞ諦めていた、あの懐かしい日本に再び帰りつき、夢にも忘れられなかった故郷の土を、もう一度しっかりと踏みしめることが出来るという喜びと期待に、万感迫る思いであった。然し一方では若くして、あたら尊い命を、この異郷の地で失った多くの戦友達の顔が次々と浮かんできて、頬に止めどなく流れ出してくる涙をどうにも抑えることができなかった。

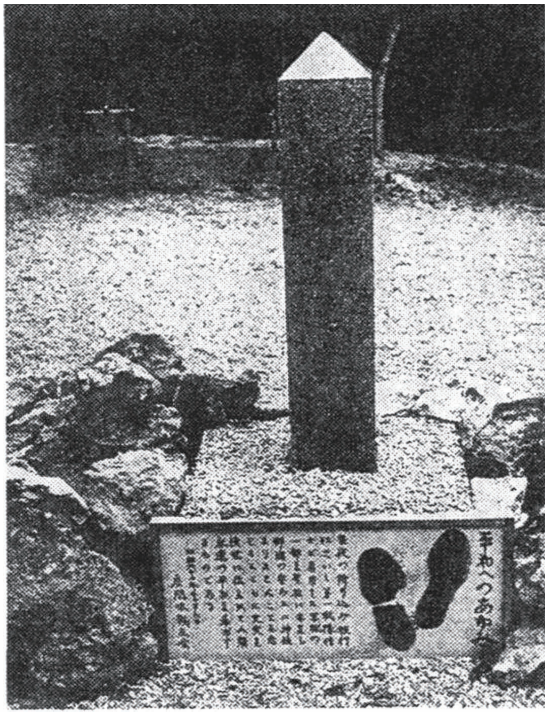
時、正に昭和二十一年十月二十八日であった。　完

あとがき

終戦後、奇跡的に復員した、私達戦友の一部で話合った結果、遺族や有志の方々も含めて広く浄財を蒐め、現地に記念碑を建立することになり、昭和六十二年三月二十六日の慰霊祭に併せてその除幕式を挙行しました。

標柱表面の「昭和白鯱隊玉砕の地」という碑名は梅沢元戦隊長の手によるもので、裏側には沢で集めた遺品の中から、雨風に曝された革底を選んでプラスチック板に溶かして嵌め込み「平和の足跡」という言葉が書き添えられました。

「昭和白鯱隊玉砕の地」碑



航空「特別攻撃隊」戦果からの考察（後編）

理事　水町　勝博

第二次世界大戦の陸軍は大東亜戦争として南方・大陸へ、海軍は太平洋へ、戦争末期には陸軍航空の主戦場は太平洋に移った。状況認識の錯誤、科学技術水準の低さ等により、航空兵力配備で立ち遅れ、特攻作戦を余儀なくしたことを考察する。

一、艦船主兵による海軍航空力の不足と航空兵力の使用は陸海不統合

○　艦船主兵

各海軍国で艦船主兵論が優勢だったのは、一定の爆薬を目標に投入する費用対効果は艦船が有利で且つ防御力が信頼されたことによる。しかし距離を考えると艦船は30㎞、航空機はその十倍以上の２００海里（３７０㎞）に達する。

１９２２年（大正十一年）ワシントン軍縮会議締結から十五年後昭和十二年から無条約になり、米英の戦艦に対抗する超戦艦40㎞のアウトレンジから砲撃できる「大和・武蔵」の建造を決定した。

航空関係者が水交会に集まり、航空本部教育部長の大西瀧治郎大佐は次の不満を述べた。「大和・武蔵は無用の長物で、一隻の建造費が二億円も掛る。鹿屋の大飛行場は農地買収に五百万円、対空防御砲火を設備して約一千万円で完成できる。二億円あれば二十ヵ所に飛行場が造れる。あと二億円あれば、新鋭の戦闘機・爆撃機を飛行場に展開できる。」（昭和十二年四月）、更に「いま日本海軍は、対米戦の研究に一所懸命だ。無用の浮沈戦艦建造を止めて、航空軍備の充実に努めるのが最も大事なことだ。そうでないと米国との戦争に必ず負ける。」と航空主兵を語っていた。

そして開戦を決定したのは「大和」建造を決定した首脳部と同じ海軍大臣嶋田繁太郎大将、軍令部総長永野修身大将であり、航空兵力の実情を知る連合艦隊司令長官山本五十六大将は成算なき戦いはすべきでない、また航空本部は反対の立場であった。

限られた資金の有効性が問われ、航空戦力の必要性を説く人、米国駐在武官経験者等米国の実情を知る人は戦争に反対であったが、その反面日独伊三国同盟・ドイツ戦線の勢いもあり開戦へと進む。

○　陸海軍航空兵力の不統合

航空部隊に対する組織編制・研究開発・兵器製造・調達業務・搭乗員養成・教育訓練などすべて、陸海軍でほとんど調整されることなく、個々に行われた。

航空兵力が初めて戦線に現れたのは第一次大戦の時、日本の陸軍機・海軍機とも少数が青島攻略作戦に参加した。この後陸軍航空はロシアついでソ連を主敵と考え、地上作戦に協力することを検討した。一方海軍航空は、アメリカを主敵と考え、太平洋で艦隊作戦に協力する事であった。

対抗する連合軍はすべて統合作戦で向かってきた。

昭和十七年四月十八日東京・横浜・名古屋・神戸など本土が初空襲を受けた時、

来襲したのはドーリットル米陸軍中佐の指揮する陸軍機Ｂ－25十六機で、発艦させたのは海軍の正規空母ホーネットであった。

ミッドウェー海戦で、日本の主力空母四隻は、ミッドウェー島からの陸軍のＢ－26双発爆撃機（雷撃）とＢ－17四発爆撃機（高高度爆撃）と二時間近く闘った後、米空母の急降下爆撃機から奇襲され、次々に沈んだ。アメリカ空母が凱旋した時、陸軍機が沈めたと伝わり、空母の乗組員は憤慨していた。

十八年四月十七日、山本五十六司令長官がポートランド島飛行場の将兵を明日激励視察する旨「武蔵」から電信した。翌十八日一式陸攻二機でラバウルを出発ソロモン上空で撃墜された時、その行動電を解読したのはハワイの太平洋艦隊情報センター、山本機を撃墜したのはガダルカナル島から発進した陸軍のｐ－38双発戦闘機群であった。

戦争末期、日本本土の軍需工場を爆撃し、都市を焼き、広島・長崎に原爆を投下したのは、マリアナ基地からのＢ－29であった。この陸軍機は日本の港湾に機雷を敷設し、日本内地の海上交通を途絶させた。連合軍は総て戦力集中・効果発揮の為統合作戦で向かってきた。

それに対し日本は統合作戦がほとんどできなかったし、その着意も見えなかった。

統合が何とか形を成したのは、十九年十月の台湾沖海戦で、陸軍重爆の二個編隊が第二航空艦隊の指揮下で雷撃を行った。

レイテ決戦に敗れ比島方面軍司令官山下奉文陸軍大将は持久戦に入る前に伝言「レイテ作戦に失敗、航空の重要性・陸海軍航空の統一運用」を大本営作戦部長宮崎中将宛てに託した。山下司令官は中将時代に航空総監兼航空本部長を務めていた経歴からか、航空戦力統合の発揮が十分でなかったと結論を出した。沖縄方面作戦では連合艦隊司令長官の指揮下で第六航空軍は特攻作戦の第一次から第九次航空総攻撃を行った。

二、戦争指導者と搭乗員養成・特攻の機運

○　戦争指導者

第一次大戦では航空機が出現すると共に、勝敗は国家総力戦によって決まることを教えた。第二次大戦で実質的に連合国の戦争を指導した米大統領ルーズベルトは、第一次大戦時、海軍次官で海軍行政を切り盛りしていた。第二次大戦が始まると参戦を予期し、戦争準備を加速させた。アメリカは車社会、自動車工場は容易に飛行機工場に転換、大学には予備士官制度があり、車運転から飛行教育を行うのは易い。

米　陸海軍の首脳部は、第一次大戦時代は佐官レベルで戦争体験をしていた。

一方開戦時の近衛首相、東條陸軍大臣、嶋田海軍大臣、杉山参謀総長、永野軍令部総長、四人の将軍はいずれも日露戦争に参加した。大臣クラスは少尉、総長クラスは大尉であり、第一次大戦は殆ど実戦経験はなかった。

アメリカは真珠湾奇襲・マレー沖海戦は、戦艦に対する航空機の威力を見せ付けられ、身に染みていた。機動部隊を指揮していたハルゼー、空母群指揮官ミッチャーはいずれも生粋のパイロット出身、一方連合艦隊司令長官山本五十六は大佐時代に航空に転換していた。その後の長官は砲術二名、水雷一名の出身であった。機動部隊は航空機の運用の差で優劣がついたのか、空母群を含んだ機動艦隊は艦載機の戦果を挙げ易く有利に行動したことが結果を生んでいる。

○　搭乗員養成

日本の陸海軍首脳は総力戦の体験なしに大戦に突入、今まで空軍力は有ればよいベターであったが、総力戦体制では制空権を確保できるベストの空軍力が必要となった。ガダルカナル島が陥落し、制空権を失い、東條総理大臣は昭和十八年

六月航空兵力の大拡充を指令した。七月学徒動員後、秋に航空機搭乗員の大量養成が始まった。十九年三月陸軍参謀本部は特攻作戦を採用、海軍の跳飛爆弾攻撃など戦法を学び、特攻訓練を開始した。海軍は航空機のみでなく「必死必勝」の兵器の必要性から研究開発が進み、昭和十九年四月人間魚雷「回天」水上「震洋」を採用、マリアナ海戦で空母三隻を失い、特攻の機運高まり、特攻専用機「桜花」を採用した。

昭和十九年五月東條陸軍大臣は意図したとおり進捗しているか、陸軍航空士官学校を抜き打ち視察した。その後七月七日サイパンが陥落、責任を取り七月二十二日東條内閣は退陣した。

特攻作戦（十月の比島、二十年四月の沖縄戦）への技量は十分でなく、指揮官等一部を除き操縦できれば出撃して行く。

○　特攻が作戦へ

太平洋戦線の絶対防衛圏（千島～小笠原～ソロモン～ニューギニア）のマリアナ諸島のソロモン・サイパンは占領され、比島に侵攻する米軍に対し十九年十月十八日捷一号作戦が開始され、大西瀧治郎中将が第一航空艦隊司令長官に十月二十日着任「神風特別攻撃隊」を編成した。最早進攻する米軍の総合戦力を阻止する方法は特攻しかなかった。

三、石油・原材料と科学技術水準

○　石油・原材料の欠陥

海軍航空本部長井上成美中将は昭和十六年七月「海軍航空戦備の現状」を調査した。航空機の原材料について「アルミニュウム・マンガン鉱・ニッケル・電気銅・亜鉛・生ゴム・航空用燃料・潤滑油等の不足は甚だしく、全力作戦時、戦争一ヵ年が持続不可能の状況にあり」と論じ、アルミニュウムと生ゴムは「その日暮らし」と言うのであった。

航空機燃料は高オクタン価のガソリンを必要とする。当時の日本ではこれを製造できなかった。国際情勢が悪化し始め昭和十三年頃から、アメリカから１００オクタン価と９２オクタン価のガソリンを緊急輸入していた。日米関係悪化とともに輸入制限を受け、昭和十六年八月一日全面的経済断交に陥った。

開戦前の御前会議での企画院総裁鈴木貞一陸軍中将の説明によると、航空燃料の貯油は１１１万kℓで、オランダ領東インドの占領に成功したとして、

日本の航空燃料生産見込みは、戦争一年目７．５万kℓ、戦争二年目33万kℓ、三年目54万kℓ、所要見積一年目は80万kℓ、二年目75万kℓ、三年目62万kℓ、各年予備20万kℓ、を考慮すると、戦争一年目は18万kℓほど残るが、二年目は36万kℓ不足する。航空燃料は長期戦には全く見込みのない戦争で、新潟・秋田の僅かな採油、松根油、石炭からの抽出研究などの状況にあった。

項目	日本	米国
人口	7193 万人	1 億 3167 万人
原油産出	28 万㌧	1 億 8960 万㌧
石炭産出	5647 万㌧	4 億 6391 万㌧
鉄鉱石	76 万㌧	9389 万㌧
アルミニウム	5 万㌧	29 万㌧
発電量	37660 百万㎾	208306 百万㎾

○　科学技術水準

航空作戦の成否は、航空機の生産や搭乗員の技量の他、作戦を支援する多くの条件に左右される。最も重要なのは航空機並びにその基地となる空母・飛行場の警戒監視能力、その代表がレーダーです。日本はレーダーは防御兵器で攻撃兵器でないという考え、電子技術水準の低いこともあって、英米に比較して大きな遅れをとっていて、山頂から目視で補完したりしていた。

日本の通信で無線電信はかなりのレベ

ルに達していたが、無線通話の発達が遅れ、航空機と基地と相互間の通信能力がなく、作戦を阻害した。

特攻機は米軍の対空砲火ＶＴ信管（電波近接信管）弾を使用され、対艦攻撃を低下させた。

太平洋戦争は島嶼の争奪戦により米軍は制空権を拡大し日本軍は消失した。その成否は水陸両用作戦能力、飛行場造成能力、海上輸送能力に左右される。日本はブルドーザーなど土木建設機械の未発達、海上輸送の末端の揚陸艦の関心も薄かった。特攻による米被害艦艇の中には空母・戦艦だけでなく、人・物の輸送艦等多種の後方支援艦艇の被害が見られた。

今まで述べてきたことは次の言葉に尽くされる。終戦の大詔を聞いたのち自決した陸軍航空本部長寺本中将（米大使館付武官補、浜松飛行学校長、第４航空軍「比島」司令官を歴任）の言葉「よくもよくも米国を相手したものだ。あちらは種を自動車でバラ撒いただけで、ほっておいても穀物の出来る国だ。その上石油はある、資源はある、第一次大戦以来、連合国数カ国の台所を賄ってきた国だ。国力を侮ったらいかん。しかし決まった以上は天子様にお仕えするだけだ」

日米の軍事力の比較は次表の通り

日本		1941年末	1943年
	兵員 陸	210万人	290万人
	兵員 海	32万人	68万人
	航空機	4.800機	9.100機
	軍艦	148万㌧	140万㌧
米国	兵員 陸	152万人	699万人
	兵員 海	36万人	211万人
	航空機	12.200機	65.900機
	軍艦	131万㌧	280万㌧

航空戦力は、質と量で示される。先端技術を屈指して造られた航空機、熟練したパイロットの技量により質は発揮される。50機の作戦機が３回／日、燃料・弾薬補給し出撃（ターンアラウンド）すれば１５０機による戦力の発揮である。しかし資源の枯渇する中、空母を失いそれを超越しようと、基地から一回の出撃で全てを失う特攻は消耗するだけの戦力で次を生まない。特攻隊員は日本の心を持ち、賛同した韓国・台湾の隊員も一緒に、この国難から祖国の安泰と家族を思い、悩んで、遺書を残し、勝利を信じ、結果を見ることもなく命を捧げた。崇高な特攻勇士のことは忘れてはならない。今日があることを感謝する。大西滝治郎中将の語録に「特攻は統率の外道である。」とある。航空特攻に限らず誤った使用は二度と繰り返してはならない。

戦後73年が過ぎ、冷戦時代は終わっても、自国の利益や覇権、民族、宗教等争いは絶えない。第二次大戦以後、争い・戦争そのものが国力・富を出し尽くし相手のそれを破壊する。産業・生活基盤・通商・補給後方の破壊が行われ、民間人の犠牲も伴う。

クラウゼヴッツの言う戦争論、戦争とは政治的目的を達成する一つの政治的手段に過ぎないと言う真理は変わらない。政治が戦争の是非を決める。シビリアンコントロールの本質でもあり、軍人は統率の本道を逸せずその是非の回答を用意し、政治を補佐しなければならない。

平和を維持するため、政治は軍事行動の効果・価値ある軍事力の整備、国家間の安全保障の構築等を怠ってはならない。また敵対をもくろむ国へ軍事力は戦争抑止の効果も発揮させなければならない。

特攻を振り返り、総力戦において誤った政治と軍事は二度とこれを繰り返さぬこと、特攻隊を顕彰することによって、陥る誤りの理解を深めるものと思う。完

特攻に散った先輩

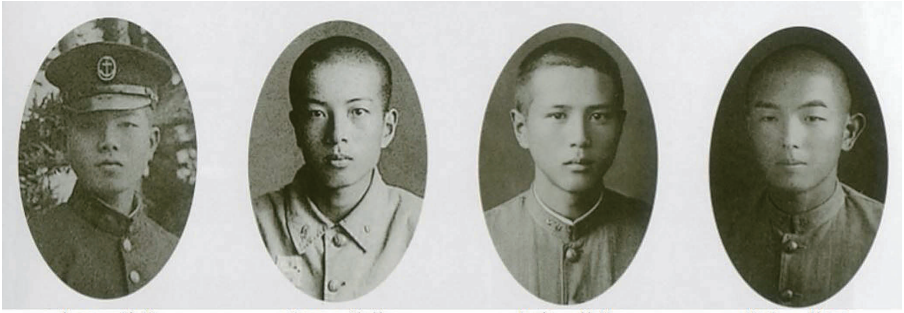
会員　中村　格

周知のごとく、近年の少子化、特に地方の過疎化、財政難などに因る公立学校の閉鎖・統廃合は全国的な流れになったが、私の母校福岡県立築上中部高等学校も時流に抗し切れず、平成一七年三月、悲憤のうちに八十八年の歴史を閉じた。閉校に際して母校は最後の記念写真集を編纂したが、これには太平洋戦争末期、特攻で戦死した卒業生四人の顔写真を載せてある。

実は前年、この写真集の企画を耳にした私は、ならばこの四人を、是非、記録に残して置くべきだと考え、知覧や鹿屋の資料館で調べたそれぞれについてのメモを、校長の清永和彦氏に送った。勿論、先の大戦では、この外にも非命に斃（たお）れた多くの先輩が居られるが、それを忘れないためにも、「特攻」という、世界戦史に類を見ない無惨な戦法に身を挺したこの四人の映像を、最後の写真集に残して置きたいと思ったからだ。

幸い、母校ではその意を汲んでくれ、早速、彼らの在校時代の写真を探し出し、メモで伝えたそれぞれの卒業期、特攻隊名、突入戦死の日付と共に、私のコメントの一部をも付け加えて掲載した（下段写真）。

まだ幼さの残る坊主頭の制服姿が痛ましい。この少年たちが、やがて祖国の急を救うべく飛行機に爆弾を抱かせ、あるいは人間魚雷となって敵艦船に突っ込んでいったのだ（注１）。



太田　鎮雄　　上西　徳英　　久富　基作　　岩本　益臣

岩本益臣大　尉	築中13期	万朶隊(陸軍最初の特攻)	隊長	昭和19年11月　5日戦死
久富基作少　尉	同　18期	知覧特別攻撃隊・第76振武隊		昭和20年　5月11日戦死
上西徳英一飛曹	同　22期	回天特別攻撃隊・多聞隊		昭和20年　8月11日戦死
太田鎮雄一飛曹	同　22期	神風特別攻撃隊・第一草薙隊		昭和20年　4月　6日戦死

四人のうち、太田・上西両氏は築中二二期。昭和一八年、私が二年の時、最上級の五年生…と言っても、今の高二と同い年だが、随分大人びて見え、動作もきびきびした怖い存在だった。当時の築中は質実剛健の気風と軍事教練の優秀さで知られ、清掃（みなき）の行き届いた校内には凛然たる気概が漲（みなぎ）っていた。

しかし、戦局はすでに落ち目で、国内は緊迫の度合いを高めつつあった。一〇月には、いわゆる学徒出陣が始まり、翌年には、中等学校生徒をも対象にした学徒勤労動員令が公布され、築中生も坑木の切り出しや築城海軍航空隊の滑走路拡張工事、更には小倉の造兵廠・山田弾薬庫等にも動員されることになり、学業そっち除けの厳しい毎日となる。

校内には、飛行兵の養成を目的とした甲種飛行予科練習生（通称「甲飛」）募集の要綱（あらまし）が掲示され、巷（ちまた）では『燃ゆる大空』『荒鷲の母』といった軍国映画がそれを煽（あお）り立てた。

飛行機が主役となった近代戦では、搭乗員として運動神経の活発な若者を大量に必要とする。ために、中学では三年終了程度の生徒までが対象となり、母校では、この年（昭和一八年）、軍の要請に応じて甲

飛合格者七二名を送り出している。

一一月、入隊生徒を宇島駅で送った情景が今も目に浮かぶ。寄せ書きの日章旗を折り畳んで襷にかけ、緊張した面持ちの少年たち。それを囲んで父兄・先生・在校生らの万歳の声。高揚した駅前広場は騒然としていた。私も親しかった先輩Ｋの手を握って励ました記憶がある。

母校は、入隊生徒への餞（はなむけ）として歌集『甲飛壮行短歌集』を贈った。ガリ版刷りの粗末な冊子だが、校長をはじめ先生方と入隊生徒・在校生の歌一〇七首からなるこの歌集は、飛行兵となって大空の決戦へと勇み立つ入隊生徒の固い決意と、それを励ます先生・在校生らの熱いエールで溢れていた。その一部を掲げてみよう。

玉と砕け花と散らばや日の本の大空守る若人われ等（入隊生徒）

大空へ競ひ出で立つ教へ子を守らせ給へわだつみの神（先生）

血潮湧く築中健児の意気みせていざ南海の空に羽搏（はばた）け（在校生徒）

冒頭の一首は入隊生徒の一人だった五年生上西徳英（写真左から二人目）の歌詠。

甲飛の課程を終え、一等飛行兵曹に任官した上西は、入隊から僅か一年八ケ月後の二〇年八月一日、基地隊員の見送るなか、小雨そぼ降る山口県光（ひかり）基地を出撃した。

記録によれば、一一日一七時三〇分、沖縄東南方海域で敵輸送船団を発見するや人間魚雷「回天」（注２）で突撃。約三〇分後、それを潜航発射した伊三六六潜に炸裂音（体当たり命中の）が、「海をふるわして聞こえてきた」（鳥巣建之助『人間魚雷』）という。祖国の栄光を信じつつ、上西は回天もろ共、あまねく虚空に飛散したのであろう。まだ一八歳九ケ月の若さだった。

出撃の前夜、上西一飛曹は、同じく回天特攻隊員として同じ基地で待機していた築中四期先輩の学徒兵岡田信雄少尉（築中一八期・京大）の部屋を訪ねて来たという。厳しい階級格差のあった海軍では、普通、若い下士官が士官の居室を気安く訪ねるなど出来なかったはずだが、同窓の絆が敷居の高さを越えさせたのであろう。今生の別れに、母校の思い出なども語り合ったのだろうか。

岡田は、出撃待機中に終戦となり、無事、生還したが、後日、家人に，しみじみと、こう漏らしたという。

「自分より先に出撃する後輩がいとおしく、先輩として誠に相すまない思いで胸が詰まった…。それにしても上西一飛曹の従容たる態度には、心底、頭が下がった」

（令妹山内靖子氏の談）。

人間果たして一生に幾何（いくばく）の事をなす。生まれては死に、覚めては眠る。五十年の年月は瞬時の光芒に過ぎずして、大宇宙に比すれば、五尺の体躯いずこにありや。小躯何に捉われ、何にか迷う。

上西がノートに書き残した死生観の一節だ。「国のためには、若い命を捧げるも悔いなし」と思い切った男子の、凛とした心根が窺えよう。無論、この心境に達するまでには、苛烈な訓練の明け暮れぬにも、人には言えぬ深刻な煩悶・内心の葛藤があったに違いないが…。

「国のため」とは何か。それはまず父母・兄弟姉妹・妻子，あるいは恋人といった愛する人々や、生まれ育った故郷の、この美しい山河を守らねば、という素朴な信念であった。兵士の多くは、上から押し付けられた「忠君愛国」「滅私奉公」といった観念を、そうした、言わば身近な者への愛情をバネとして意味づけ、「死」を自らに納得させようとしたのである。祖国と同胞を守るためには若い命をも惜しまない―それが日本男子たる者の矜持であった。

敗戦間際の苛酷な勤労動員で倒れ、休学を余儀無くされた私は、戦後の二二年に復学したが、母校は間もなく男女共学の新制高校となり、民主的で、明るい、自由な（そして幾分だらけた？）校風に変わった。つまり、私は、旧制の築上中学と、新制の築上中部高校の二つで学んだことになる。

けれども、母校消滅の今、私にとっては、共学となった戦後の築上中部高校より、何

故か、戦時下の、あの張り詰めた時代の築中が懐かしい。しっかりした先輩がいて、純朴な、規律正しい学校であった。そしてあの頃の、ナイーブな悲愴感さえ漂う質実剛健の校風が、今なお忘れ得ぬ思い出となっているのも否定できない。老輩の埒もない郷愁と笑われるかもしれないが、校歌の一節「百折不撓」は、今も座右の銘として、胸中に在る。

（注１）但し、岩本大尉（陸士五十三期）は特攻出撃の七日前、マニラの軍司令部に呼び出され、部下の操縦する爆撃機に同乗して向かう途中、敵戦闘機の急襲に遭い撃墜された。享年二十八。残された万朶隊隊員は一週間後の十一月十二日、岩本隊長の遺骨を抱いて出撃した。

（注２）太平洋戦争末期、日本海軍が敵艦船への体当り攻撃に用いた一人乗りの人間魚雷。潜水艦に搭載して出撃した。全長一四・七五メートル・時速三〇ノット・炸薬量一五五〇キロ。潜航する潜水艦から発射された。

筆者略歴
千束（今市）出身／一九五〇年卒業／東京教育大（現、筑波大）文学部卒／東京学芸大名誉教授／俳人協会会員／東京都清瀬市在住

筑波海軍航空隊記念館研修に参加して

評議員　原知崇

平成三十年度顕彰会事業の一環として十月二十九日に、筑波海軍航空隊記念館を見学しました。

筑波海軍航空隊は昭和九年、霞ヶ浦海軍航空隊友部分遣隊として発足し、主に教育航空隊として戦闘機搭乗員養成を主任務としていましたが戦局の悪化により、昭和十九年末からは教官および教員による邀撃隊を編成、二十年に入ると迎撃戦闘を実施。さらに神風特別攻撃隊「筑波隊」を編成し、特攻作戦に従事しました。

航空隊の遺構は戦後学校に転用され、昭和三十五年には茨城県立友部病院（現在は茨城県立こころの医療センター）となり、県の管轄となって司令部庁舎をそのまま使用していましたが、新病棟落成によって平成二十三年、病院設備が移動した際、旧庁舎内に航空隊の遺品の展示が行われました。

平成二十五年に公開された特攻隊員を主人公とした映画『永遠の０』（山崎貴監督）のロケ地として使用された事をきっかけに旧庁舎を期間限定イベントで「筑波海軍航空隊記念館」とし一般公開を開始。期限満了を経て現在は改めて市の指定管理を受け、本年六月にリニューアルし、同名で再オープンしています。

当日は、七名の参加者は昼過ぎに友部駅に集合し、車にて記念館に到着しました。秋晴れで天候にも恵まれ、かつての航空隊の雰囲気を残す広い敷地内に足を踏み入れると、進むにつれ航空隊時代の隊門、旧庁舎、そして堅牢な号令台が目に入ってきます。その他にも、東京ドーム三十八個分と言われる敷地内には、裏門、桜並木の他、三角形の滑走路跡が確認出来たり、掩体壕や地下戦闘指揮所（現在は民有地であり、公開はされていない）、地下応急治療所、二・二キロに及ぶ地下トンネルなどが残る、関東では他に例を見ない大きな遺構です。以前は旧庁舎の中で展示が行われていましたが、現在は隣に新しい展示館が完成しており、旧庁舎の前を通り、そちらへ入りました。

まず二十分ほどの映像を視聴。友部空（ともべそら）くんという搭乗員のキャラクターとともに筑波空について、また特攻作戦の意義について学べる内容でした。三十代後半と比較的若い来場者が多い施設であることから、戦争を知らない世代に向けてのやわらかめの導入からにも関わらず、特攻隊という言葉の成立や、当時の状況から命がそのまま武器となった事など、他では表現を避けるような部分にまで言及していたのは高く評価すべ

きと感じました。

ある隊員は「今度、凄い部隊ができる。一発で確実に敵艦を撃沈できる兵器だが、生きては帰れない。」筑波空で、こんな言葉を上官から聞かされた。それが桜花の事だった。昭和十九年、百里原海軍航空隊で編成された第七二一海軍航空隊、神雷部隊は編成そのものは神風特別攻撃隊より先であり、人類史上初めて、唯一体当たりを前提とした部隊ですが、神雷部隊桜花隊創設時の四人の分隊長はこの筑波空出身者であり、人員の選定や作戦の「容認」においてこの地が特攻隊の「起源」に大きく関わっていたこと。また筑波空は搭乗員、特に戦闘機教育の中心的役割を果たしており、学生は兵学校出身者も多く、最新鋭であり最強の兵器桜花の要員、中でも一番槍は兵学校出身者が切り開くべきと考えられていたことが説明されました。

その後、金澤館長のご案内で司令部庁舎を見学しました。庁舎は航空母艦の形状をイメージしてデザインされていると説明を受けました。庁舎は戦後様々に遍歴があったものの、改装計画の担当者が歴史的に貴重な建物と理解した上での配慮をし、いつか元の姿に戻すことが出来るような改装に留めてあったという僥倖もあったそうです。映画のロケ地として使われたことから、撮影時のイメージを展示してあるスペースもありますが、概して建物内部の保存状況が素晴らしく海軍時代の様子を感じる事が出来ます。参加者の中にも、廊下や階段など随所で古い自衛隊の建築との類似を指摘する声が聞かれました。司令室には壁一面が大きな木製の扉になっているアーカイブルームが付属しており、当時は秘にあたる書類が多数納められていたようです。コンピューターの発達した現代の庁舎では信じられないほどの紙が必要であった時代が偲ばれます。練習機として使用されたアブロ５０４Ｋの部材など、日本航空史上貴重な収蔵品も見る事が出来ました。

次に、一般に通常公開されている新館を見学。単に貴重なものを並べているのみでなく、戦争に参加した「人」にスポットを当てている展示となっていました。ご両親から結婚の許可が出るも、その３日後には特攻隊員として出撃した藤田暢明少尉。その遺影と結婚式を挙げた睦重夫人の花嫁姿の写真。金井正夫少尉が二百通もの文通を重ねながらもついに会うことの叶わなかった女学生に送った最後の手紙。それに同封され、二人のイニシャルが刻まれた手彫りのハート型のペンダント。そうした展示の一つ一つを見るのは、我が国存亡の危機に臆せず立ち上がり、国防に身を投げ打たれた先人が、軍人、搭乗員、特攻隊員、そうした言葉で括られる前に、一人一人が全力でその時代を駆け抜けていった若者であったということを眼前に突きつけられる思いでした。

金澤館長ほかスタッフの方は当初、フィルムコミッションとして筑波海軍航空隊遺構に携わられましたが、イベントとして期間限定で公開されたこの遺構を文化財として認め、保存し公開し続けていくべきと考えたそうです。現在、日本各地で戦争遺跡の保存、公開が盛んに謳われていますが、筑波海軍航空隊記念館はその旗手的立ち位置と言えるでしょう。戦争遺跡は悲しみの遺産として捉えられる事が一般的で、当然ながら扱いを軽々には出来ない側面があります。しかし館長は「なりふり構わない。遺すためならばなんでもやる。」というスタンスで歩んでこられたそうです。まずは人に知られること。そして来てもらわなければ維持や見学者の安全確保のための予算も得られない。その為にたえず想定外を起こし続ける。イベントを開催し、グッズを企画・販売し、笠間市の地域活性化と観光

振興に繋げ、茨城県有数の観光地となり、本年まさに常設のミュージアムとして帰結されました。この十一月には筑波、鵜野、宇佐、菊池、人吉、鹿屋の各海軍航空隊関連遺跡地域間連携シンポジウムも開かれ、「特攻容認の地」筑波海軍航空隊記念館の存在意義はこれからも益々重要となっていくのではないでしょうか。

同記念館には「筑波海軍航空隊ここにありき」の慰霊碑（記念碑）があり、七十三名の戦死者のため、毎年慰霊祭が行われています。

ＪＲ常磐線・水戸線　友部駅下車　友部駅南口よりタクシー約六分「茨城県立こころの医療センター」行きバス約十分

休館日　毎週火曜日・年末年始開館時間

〇九〇〇～一七〇〇

入館料

大人五百円　小人三百円

保存されている司令部庁舎

司令部庁舎入り口

司令室扉前で説明する金澤館長

連載　山ある記　長野県「浅間山」

会員　池田　康博

浅間山登山が約３年ぶりに解禁になった。と言っても浅間山の第二外輪山である前掛山までであるが、10月７日、ともかく出かけた。朝６時過ぎに浅間山荘の登山口に着いたが、既に大きな駐車場はほぼ満杯であった。６時25分に登山口を出発、ここは標高約千四百ｍ、頂上まで千百ｍほど登ることになる。

沢沿いの登山道を、紅葉や滝を楽しみながらひたすら登って行く。やがて、沢の行き止まりとなっている谷に出たが、そこは白い噴気を出し、岩には硫黄が付着した光景があった。一変した景色と、強い臭気が漂っているこのザレ場を抜けるとシェルターの役割を持つ「火山館」に着く。ここで小休止をとり、さらにしばらく登ると、第一外輪山の黒斑山や蛇骨岳への分岐となっている湯の平口である。時刻は８時10分、コースタイムより若干早く登ってきた。

浅間山（前掛山）山頂

湯の平高原は、一面、真っ黄色に染まったシラビソの樹林帯と第一外輪山の斜面の緑と紅葉が素晴らしい。景色を堪能しつつ歩を進める。８時26分に前掛山分岐を通過。ここからは前掛山の山腹を斜めに真っ直ぐ延びた、傾斜もきつく足場も悪い登山道を一歩、一歩と登って行く。９時12分にやっと浅間山への「立入禁止」の看板がある地点に到達、ここで右に方向を変えて前掛山へと向かう。

シェルターが２棟設置された脇を通って登って行くと、やがて、前掛山の稜線に出る。右は前掛山の急な斜面、左は浅間山との間の深くえぐれた崖となっている幅２ｍほどの道を登って行くと、午前９時30分、山頂に着いた。生憎、山頂部はガスがかかっていて、目の前にあるはずの浅間山は、強い風に流されるガスの切れ間に、時々ぼんやり見える程度であった。

実は、今回の登山にはもう一つの目的があった。それは、昭和20年８月18日、敗戦の三日後に、浅間山を目掛けて突入し自爆した特攻隊長、西川俊彦中尉の慰霊である。

しかし、西川中尉が「・・皇国勃興の暁までは浅間山頂に厳として活きて居ります。・・」と遺書をしたため、愛機と共に激突したのは前掛山であった。

昭和21年５月、機体の残骸と共に遺骨も発見され、ご家族によって山頂部に埋葬、ケルンが築かれた。その後、昭和40年にご遺骨の一部を山頂に残し、郷里の祖先の墓に埋葬されたという。しかし、山頂部ではそれらしきケルンや痕跡を見つけることはできなかった。

この日、狭い山頂部は、登頂の記念写真を撮る順番待ちの登山者で混雑し、73年前に起きた西川中尉の悲しくも壮絶な最期を、誰も知らぬげな歓声に溢れていた。

９時42分、登頂の達成感も半端なまま下山開始、一瞬姿を現す浅間山に、その都度足を止めながら稜線を下って行き、12時42分に登山口に到着した。

追記：西川俊彦中尉の遺書等については、インターネットで検索できます。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部

俳句

● 冬桜　せめて見せたや　征く君に

淳

短歌

● 我が想い　知るか知らずや　彼の君は
微笑みかける　我をみつめて

淳　子

川柳

● 口まめが戻り全快間近なり

● 着ぶくれとまやかし実は冬太り

井下駄マスオ

平成30年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告等

事務局長　石井光政

一　平成30年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告

昨平成30年11月14日（水）に、当顕彰会事務室において第3回理事会が、12月7日（金）に、靖國会館九段の間において第1回臨時評議員会が、それぞれ開催され、平成31年度事業計画及び別掲の収支予算（正味財産増減予算書・案）が審議され、いずれも平成31年度計画として承認されました。

なお、平成31年度当初の当顕彰会の理事、監事等及び評議員は、次のとおりです。

理事等

会　長　杉山　蕃
理事長　藤田　幸生
副理事長　岩﨑　茂
専務理事兼事務局長　石井　光政
業務執行理事　水町　博勝
業務執行理事　小倉　利之
理　事　臼田　智子
理　事　鮒田　英一
理　事　大穂　園井
理　事　岡部　俊哉
監　事　阿部　軍喜
監　事　羽渕　徹也

評議員

秋山　政隆　石井　千春
及川　昌彦　倉形　桃代
長瀬　彰考　新垣　敬輝
根木　東洋　早川　雅彦
深山　明敏　片山幸太郎
原島　淳子　岩成　真一
原　知崇　福江　広明
宮本　雅史　太田　兼照

二　第40回特攻隊全戦没者慰霊祭の開催について

第40回の慰霊祭は、靖國神社において平成31年3月30日（土）11時分から執り行います。なるべく多くの方とご一緒に特攻隊の英霊に哀悼と感謝の誠を捧げたいと思います。会員以外の方でも参列できますので、お誘い合わせの上、御参集ください。

慰霊祭の細部については、同封の案内書をご覧ください。参列される方は、同じく同封の「郵便払込取扱票」（会費納入用紙兼用）にご記入の上、お申込みください。

三　平成31度年会費納入について

当顕彰会の会計年度は、1月1日から12月31日までです。同封の「郵便払込取扱票」により平成31年度の年会費をお納め下さるようお願い致します。

なお、この「郵便払込取扱票」は、慰霊祭参加申込書も兼ねていますので、慰霊祭に参列される方は、この取扱票をご使用になり、同時にお払込み下さるようお願い致します。（既に本年度分の年会費を納められている方は、「入金済」と記入してあります。）

事務所の移転

事務所を左記の住所に移転します。

1月29日移転完了、新事務所での業務開始は2月1日からです。

〒102－0072
東京都千代田区飯田橋一丁目5－7
東専堂ビル2階

電話番号及びFAX番号は移転前と同じ予定ですが、詳しくは次号及び顕彰会HPで報告致します。

事務局からの報告等

一　寄付者等の報告

寄付者御芳名（敬称略）

（平成30年10月1日～12月31日）

（単位千円）

一〇〇　呉　奈々子　三〇　枡田　恭典
八　松中　義昭　七　渡邉　斉己
七　岡本　貴鮮　二　栗田　貞子
二　殿谷　章　二　竹内　奈緒
一　三谷　秀史　一　藤本　英憲

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
平成３１年度正味財産増減予算書

平成３１年１月１日から平成３１年１２月３１日まで　（単位：円）

科　　目	３１年度予算	３０年度予算	３０年度見込	対前年予算増減	備　　考
Ⅰ 一般正味財産増減の部					
1 経常増減の部					
(1) 経常収益					
① 基本財産運用益	10,400,000	9,400,000	11,406,000	1,000,000	
② 特定資産運用益	280,000	330,000	327,000	△ 50,000	
③ 年会費	3,800,000	3,600,000	3,897,000	200,000	30'参考
④ 慰霊事業益	2,400,000	2,320,000	2,453,000	80,000	30'参考
⑤ 出版事業益	30,000	70,000	37,000	△ 40,000	30'参考
⑥ 受取寄付金	4,500,000	4,100,000	5,417,000	400,000	30'参考
⑦ 雑収入	0	0	1,000	0	
経常収益計	21,410,000	19,820,000	23,538,000	1,590,000	
(2) 経常費用					
事業負担金	910,000	820,000	1,271,000	90,000	30'参考
像制作委託費	1,840,000	3,600,000	2,869,000	△ 1,760,000	
発送等委託費	3,820,000	1,810,000	1,641,000	2,010,000	
他団体助成費	1,900,000	1,610,000	1,989,000	290,000	
役員報酬	400,000	340,000	400,000	60,000	
給料手当	5,503,000	4,783,000	5,363,000	720,000	
福利厚生費	802,000	668,000	801,000	134,000	
旅費交通費	3,420,000	3,290,000	4,207,000	130,000	
通信運搬費	518,000	416,000	483,000	102,000	
減価償却費	2	2	2	0	
消耗品費	764,000	1,020,000	753,000	△ 256,000	
印刷製本費	996,000	943,000	984,000	53,000	
会議費	220,000	280,000	228,000	△ 60,000	
光熱水料費	142,000	113,000	142,000	29,000	
賃借料	2,863,000	3,300,000	2,263,000	△ 437,000	
諸謝金	170,000	250,000	237,000	△ 80,000	
臨時雇賃金	864,000	0	352,000	864,000	
経常費用計	25,132,002	23,243,002	23,983,002	1,889,000	
評価損益等調整前経常増減	△ 3,722,002	△ 3,423,002	△ 445,002	△ 299,000	
基本財産評価損益等	0	0		0	
特定資産評価損益等	0	0		0	
当期経常増減額	△ 3,722,002	△ 3,423,002	△ 445,002	△ 299,000	
2 経常外増減の部					
(1) 経常外収益	0	0	0	0	
貯蔵品資産受入	0	0	0	0	
資産計上	0	0	120	0	
投資活動収益計	0	0	120	0	
(2) 経常外費用	0	0	0	0	
特定資産への振替	0	0	0	0	
貯蔵品除却損	0	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	120	0	
当期一般正味財産増減額	△ 3,722,002	△ 3,423,002	△ 444,882	△ 299,000	
一般正味財産期首残高	283,217,575	293,280,090	283,662,457	△ 10,062,515	
一般正味財産期末残高	279,495,573	291,262,090	283,217,575	△ 11,766,517	
Ⅱ 指定正味財産増減の部	0	0		0	
一般正味財産から振替	0	0		0	
当期指定正味財産増減額	0	0		0	
指定正味財産期首残高	0	0		0	
指定正味財産期末残高	0	0		0	
Ⅲ 正味財産期末残高	279,495,573	291,262,090	283,217,575	△ 11,766,517	

新入会員名簿（敬称略）

（平成30年10月1日～12月31日）

山形　藤本　英憲
栃木　太田　秀雄
群馬　松嶋　喬
埼玉　竹内　奈緒
千葉　神保　明生　松村　了介
東京　山田朱実子　若木　利博
板持真理子　三谷　秀史
芦澤　博之　山本　雄史
梶原　武　黒瀬　公一
入谷　進　飯田　隆夫
平林　武志
神奈川　佐藤　哲
広島　大谷　智香　武安　俊隆
宮崎　土持　孝博

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の誠を捧げます

北海道　黒島宇吉郎（30・2・9）
青森　工藤　拓二（30・9・24）
岩手　斎藤　健三（30・12・10）
福島　小林　正昭（30・5）
埼玉　鈴木　達也（30・9・3）
山口　武夫（30・11・19）
千葉　岩井　良平（30・10・15）
東京　北村　昭正（26）
秋葉　義孝（30・3・24）
中西　博三（30・8・10）
東京　赤井　英夫（30・12・4）
神奈川　高梨　久義（30・8）
中谷　一夫（30・11・28）
静岡　藤塚　温威（30・12・16）
愛知　山田　治男（30・8・15）
大阪　大蔵久美子（30・7）
兵庫　島村　公男（29・7）

二　会報122号の誤り訂正

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正、加筆し、お詫び申し上げます。

（一）　会報『特攻』第122号正誤表

寄付者御芳名（敬称略）

55頁1段目　右1行
誤　呉　菜々子
正　呉　奈々子

55頁1段目　右4行
誤　館元　勲武
正　舘本　勲武

55頁2段目　右5行
誤　鈴木　敏生
正　鈴木　敏博

55頁3段目　右24行
誤　田中　郁子
正　田中　育子

新入会員名簿（敬称略）

55頁6段目　右4行
誤　岩埼　順
正　岩埼　順哉

（二）　寄付者御芳名記載漏れ

平成30年10月1日～12月31日）

（単位千円）

一〇　小坂　宜雄
一〇　吉田　三郎
七　服部　義隆
七　西村　米子
五　堂坂　清
四　丸田　綾子
三　江副保次郎
三　中村　実
三　原田里津子
二　小野　恒夫
二　田中　正和
二　寺井　俊一
二　澤田　壽朗
二　石本登志夫
二　水野　清
二　岩﨑　茂
二　大瀧　成紀
一　村山　公一
一　佐多　和仁

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）

・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等

・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員　３０００円

・学生会員　１０００円

○　URL:http://www.tokkotai.or.jp

ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

１　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、テキスト、又はワードファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上お受けできません。

２　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

３　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

４　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

５　会報・機関紙、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７２
東京都千代田区飯田橋一丁目５―７
東専堂ビル２階
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　tokusenikenkai@tokkotai.or.jp